婦人衛生雜誌

大正元年十月二十日發行

第二百七十五號

婦人衛生雜誌

第二百七十五號目次

私立大日本婦人衛生會

十一月例會通知

來る十一月二日(第一土曜日)午後一時より神田區一ツ橋通り共立女子職業學校内に於て本會例會相開き左の講話有之候に付き御知友御誘引御來會被下度候也

一、如何にして虎列刺を豫防すべきや

警視廳第三部醫長　醫學士　栗本庸勝君

大正元年十月

私立大日本婦人衛生會

私立大日本婦人衛生會

設立趣意書

凡そ人として此世にありては徒に生けるのみをもて足れりとするにはあらずかならずや智識を磨き人たるの本分を盡くし幸福快樂のうちに一年を送らんを皆ともに希はざるはあらじされども其身健康にあらざれば此生活を得んをいと易からずこれ衛生の道の一日も忽にすべからざる所以なりとす

抑も〳〵衛生の法は一にして足らずとはいへども衣食住の改善育兒及看病法等の如きはいとも緊要の事にして皆吾等婦人のもつぱら掌るべき所其責任重しと云ふべし今や婦人の會合相尋て起り婦人社會も漸く其の面目を改めんとするは眞に喜ばしきことなりされども夫の衛生の事に至りては更に注意を怠かざるものゝ如くまことに口情しきことなり因りて頃日同志婦人集ひ謀り一會を設け名けて私立大日本婦人衛生會といひ毎月一回集會を開き學識經驗ある人々に衛生上諸般の講義演說談話を乞ひ互に相研究し尙之を筆記して册子を編輯し會員に分ち聊か同胞の爲めに盡すあらんとす茲に本會旨趣の梗概を敍べて廣く江湖の諸愛姉に告げ其賛成を仰ふぐことしかり

明治二十二年十一月

首唱者總代

私立大日本婦人衛生會規則摘要

（明治卅二年十二月改正）

第一條　目的　本會の目的は汎く婦女子をして人生の健康を保持する方法を講究し衛生上の智識を開發せしめ隨て社會全般の幸福を增進するにあり●第二條　本會は私立大日本婦人衛生會と稱し之を東京に置き地方に便宜支會を設く●第三條　本會會員たらんと欲する婦人は何人にても入會することを得●第四條　入會の節は姓名族籍住所及會員の種類を明記し本會事務所に申込まるべし入會者には會員章を交付す（交付手續卷末に詳なり）入會後轉居等あるときは速に事務所に報知せらるべし●第五條　會員を分ちて終身、特別及通常の三種とす　終身會員は一時に金廿五圓以上特別會員は一ケ月金三拾錢以上　通常會員は一ケ月金拾五錢を納むる者とす●第六條　男子にして本會の旨趣を賛成する者は之を賛成員とす其會費は本會員に同じ但本會に功勞ある者又は本會に於て特に賛成員たることを望みたる節は役員の協議に依り無會費とすることあるべし●第七條　會員は本會に於て毎月發刊する雜誌を無料にて受ることを得●第八條　退會せんとする者は其旨本會事務所に報知し死亡する時は親戚知友より通知せらるべし但既納の會費は總て返戻せず●第九條　本會に推薦員を置き其中より總裁一名を奉じ皇族の妃殿下に願出るものとす●第十條　本會に左の役員を置く會長一名、副會長一名、幹事七名、評議員三十名、書記若干名●第十一條　會長副會長幹事評議員は隔年三月の總會に於て會員の投票を以て之を選擧し書記は幹事の推薦に依り會長之を命す但書記は都合に由り會員外の婦人若くは男子に託するとあるべし●第十二條　會長は本會を總理し副會長は會長を補佐し會長事故ある時は之を代理し幹事は會務を掌理し評議員は重要なる會務を評議し書記は役員の命を受け諸記錄雜務を掌る幹事の分課を設け第一會計　第二編輯出版、第三庶務とす●第十三條　臨時指名委員の件●第十四條　會長副會長幹事評議員の任期は二ヶ年とす滿期再選することを得若し任期中缺員を生するときは次點者を以て補缺す●第十五條　會長副會長幹事評議員は無給とす書記には相當の報酬を給す●第十六條　集會は例會總會及評議員會とす集會は八九月を除くの外毎月一回とし總會は三月に之を開く若し急要の事あるときは臨時に總會を開くことあるべし又春秋二回會員相互親睦の爲め園遊會を開くことあるべし●第十七條　毎會學識經驗ある人々に衛生上の講義演說談話を囑托し會員しての隨意聽講せしむるものとす●第十八條　會員は家族の婦女若くは知己の婦人を本會々場に誘致し講義演說等を傍聽さしむるとを得（但衣服は總て質素たるべき事）●第十九條　講義演說等は男子の傍聽を禁す●第二十條　規則の改正其他重要の件議定のこと●第廿一條　毎年三月總會に於て會計の收支決算並に庶務の概要會員の増減等を報告すべし●第廿二條　本會の所有金は本會の名義を以て三井銀行に預くるものとす●第廿三條　會計の收支は總て會計擔任の幹事檢印を要するものとす●第廿四條　會計は一ヶ年毎に決算し翌年三月總會に報告すべし

支會●第廿五條　地方に於て本會々員十名以上發起者あるときは其規則を定め本會長の承認を受け支會を設立することを得●第廿六條　本會々員にして支會を設立せんとするときは發起者の姓名を記載して申出べし附後員數増減あるときは其姓名を支會より本會に求稱所に揭告すべし本會會員にして支會に加入したる者の會費は本會に納付することを止め支會の規定に依るものとす●第廿七條　支會には支會限りの會員を置くことを得●第廿八條　本會の雜誌は支會に回送すべきを以て其實費を支會より本會に送付すべし支會限りの會員にして雜誌を請求する者に就きても亦同じ●第廿九條　支會は集會の都度其狀況を本會に報告すべし

●雜件　第三十條　本會は毎月一回雜誌を發刊し之を會員に配附すべし●第卅一條　會員又は會員外の者にして金圓若くば書籍物品等を本會に寄贈する者ある時は本會々長の名を以て謝狀を贈り寄贈者の姓名及品目を簿册に登錄し尙本會雜誌を以て報告すべし●第卅二條　會費金は受領證を交付すべしと雖も地方會員にして小爲替又は郵券にて納むるものは受領證送費として別に返信料を添へらるべし（郵券送一割増）●第卅三條　會費は東京府下に限り毎月領收人を差出すべし地方會員は總て前金とし振替にて口座番號東京一○六○○番本會事務所宛に振出しあるべし●第卅四條　會員中若し本會の障碍となるべき所爲ある者又は屢く會費を督促するも納付せざる者あるときは會長評議會の決議を經て除名し若しくは廣告することあるべし

東京市麴町區富士見町二丁目卅二番地　私立大日本婦人衛生會

講演

虎列剌病に就て

醫學博士　宮本　叔

目下虎列剌病が都下にも迫つて參りましたに就て、何か御參考にもなる可き事を御話しせよとの會長からの御依頼を受けまして、喜んで御受けを致し參上いたしたる次第であります。凡そ衞生の如き日常生活と密接の關係を有して居りまする事柄は、幾ら學問が進みましても、一方實際に行はれねば何等の效力なきものであります。而して之を實際に應用し、一般に行はしむると云ふには、其手段がなか／＼困難であります。然るにかゝる日常生活に尤も密接にして有力なる御婦人の御會合に於て豫防上多少なりとも御役に立たらうと思ふ事を御話致しまして、それが皆樣の御口から繼ぎ／＼に諸方に傳へて頂きまして、目前に迫つて居りまする恐る可き疾病の豫防上裨益する事を得ますれば、自分に取りまして誠に本懷の至りで、喜んで御受を致したる譯であります。

虎列剌の事に就ては日々の新聞紙上にも事實やら人々の說やらが掲載されて居るので、大方は御承知になつても居りませうし、又先程栗本君からも詳しく御話になつて居りませうから、私の申上る事は誠に僅かで、定めて重複する所が多からうと存じますが、此邊は御許を願つて置きます。又可成重複を避けて御話を致す事に勉むる心得であります。

私は先づ第一に虎列剌は如何に恐る可きものであるか、第二に此病はどうして日本に流行し、如何なる風に蔓延するかと云ふ事を歴史に就て其實際をお

話して見ようと思ひます。

虎列刺は元來日本固有の病氣でない、其日本に流行するのは露西亞とか支那とかの敵國が攻めて來たのと同じ事で、攻めて來ては無くなり、又新たに攻め込んで板面をするのである、此神代から日本に無つた虎列刺が始めて我國に侵入し來たのは、凡九十年前、即ち文政五年で、その種は南洋布哇あたりから直接にか、或は清國あたりを經てか、船と共に下ノ關地方に參りまして、舊曆の八月中旬頃海邊より萩の邊に入り、之れに罹つて三千人も死し、之より中國筋を經て八月下旬大阪に侵入し、川筋に猖獗を極め、淀川を上つて伏見に入り、之れより一方京都を侵し、只今の京都の人口なる七條邊に尤も盛んに流行を致し、一方は船に陸に泉州に乘込み、又京都より東海道を上り、沼津邊迄來たが、箱根で喰止められ、其時は遂に江戸迄は參らずして止みましたが、全國で之れが災に罹つたものは非常なものであつたと想像いたします。此度の流行の事は富士川君の書物に詳しく書てあります。

其後三十餘年全く跡を斷て居りましたが、安政五年に再び流行がありました。此度は又々船で支那より來たもので、五月頃より長崎邊に流行し、中國より進んで京阪に及び、東海道の宿々より箱根を越え或は船で、今度は江戸を襲擊し來つて、八月上旬から十月迄大流行を來たし、死するもの三萬人の多きに上ぼり、將軍も此病氣で薨去されたと噂が立つた位で、俗間に知られた人々の內でも、錦繪で近頃西洋迄でも持囃されて居る廣重を初め五代目川柳、清元延壽大夫、杵屋六左エ門、小說家種員、京山、書家の市川米庵、畫家の菁々其一など皆吐き瀉しをして死し、又彼の詩人として慷慨家として偉人なる梁川星巖も亦京都で虎列刺で斃れました。そうして病は江戸で止まらずして、奥州迄及んだと云ふ事で、云はゞ支那から長崎に攻め寄せて、だん／＼と殆んど日本全國を暴れ廻はつたと云ふ次第であります。今其當時江戸の有樣は如何であつたかを申上る爲め

に、武江年表と云ふ書物を一寸讀み上げて見ますと七月末の頃より都下に時疫行われて芝の海邊、鐵炮洲、佃島、靈巖島のほとりに始まり家毎に此病痾に罹らざるはなし(中略)始の程は一町に五人七人次第に殖て擔を並べ一ッ家に枕を並べ臥たるものあり路頭に匍匐して死につけるも有けり(中略)此等のわざわいを攘ふ爲とて鎭守祠の神輿獅子頭を街頭にわたし云々(中略)又此頃魚類を食へばこれにあたりて速に死すると云ひて魚類を求むる人甚だすくなし故に漁者魚舖活業を失ひ料理屋もこれに亞げりわきて鰯には毒ありとて鮮魚といへども求むる人なしよつて鷄卵青物價を增たり棺を售ふものわけて高價を貪り晝夜を分たずして造れども出來あへず後には普通の桶を作るもの又は大工を傭ひてこれを造らしむこのこともから些しく貨殖せるものあれどやがて其病にかゝりしも多かりし寺院も葬儀にかゝりて片時の暇なし小塚原、深川靈巖寺、桐ケ谷、四谷狼谷落合村其餘三昧の寺院は混雜云ふべからず棺を積む事山の如く故に此事を得ずして數十日の後を約し置或は價をまして次第に荼毘の烟とはなしぬ其あたりの臭氣鼻を襲ふて堪えがたかりし(中略)八月朔日より九月末まで男女この病に終れるもの凡貳萬八千人火葬九千九百餘人なりしと云ふ云々

之を讀んで見ても、當時病が如何に猖獗を極め、又、都下の人々が如何に恐れ惑ふたかと云ふ事が想像され、又病氣が佃島靈岸島等の川筋に始つた云ふ事、人々が魚殊に鰯を恐れたと云ふ事も知れます。一日に三萬人死んだと申します。三萬とか五千何百とか云ふ數字ほど無味乾燥なものはありませぬが然し此三萬人と云ふ數を一つ〱分つて考へて見ると、親を失ふたものもありませうし、子供を失ふたもの、又一家枕を並べて死んだものもありませう。實に個人としても慘しきこと、國家としても大損害であります。死者三萬人あれば一戰爭出來る。三萬人は國家同胞の爲めに盡して命を差し出す事が出來るので

あります。又こゝに此頃出來ました「安政午秋頃痢流行記」と云ふ本がありますが、棺桶を燒場で燒いて居る圖などがあります（書籍囘覽）。此翌年も少々流行して止んで仕舞ましたが、文久二年に痲疹の流行の跡で又々江戸に流行しましたが、此時の事は詳しく知りませぬが、武江年表などを見ましても中々盛んであつたらしく見えます。こゝにありまする六七冊の書物は甚だ下俗なものでありますが、これは文久二年に「關の戸」「梅の暮」「お妻八郎兵衛」「幡隨院長兵衛」等を虎列剌の文句に作り替た替謠と云ふ様なもので、此等のものが出版いたされた位でありますのを見ましても、大分流行したと云ふ事が想像されます（書籍囘覽）。又此書物中死本佃太夫、死本築地太夫などの名あるを見、又『お前の病氣の始りは江戸紫（鰯の事）の細姿一口たべて』云々の文句あるを見ると、此文久の流行も同じく佃島等の川筋に多く、又鰯などの魚が原因であると云はれた事がわかります。

其後暫く跡を絶て居りまして、明治の代になり十年西南戰爭の後九州に流行して凱旋と共に東京に侵入して十一年から二年程流行し明治十五年十九年、日清戰爭後即ち二十八年に可成盛に流行し其間其後間々在りましたが極めて少流行で止んだのであります明治四十一年の流行は東京では輕くすみましたが其傳播の狀が面白いから一寸御話し致しますが此時も例の通り支那から下の關邊へ參りまして神戸大阪を經て横濱に來り横濱では始め船の荷上人足など船や水に關係あるものが多く罹りそれから横濱東京通ひの運送船の船頭が病氣に罹つて東京に持ち込みまして靈岸島越中島邊に沿ふて兩國堅川通に出で本所の船頭等の泊る木賃宿に發し小松川の堀川を傳つて同村に流行し進んで千葉に入込みました船頭には千葉人が多いのでつまり船頭が横濱から東京を經て千葉に持込んだのでありますかく川添には病人があつたが市中には極めて稀でありました然るに遂に市中にもボツ／＼と出る様になりましたが之れは千葉から

逆輸入に及んだのが在ります神田の材木屋の下女が兄が腦膜炎で死んだので法事の爲めに千葉縣に歸り御馳走を重詰にして持返り主家の雇人即ち朋輩や子供等に食べさせましたところ其内から虎列剌患者が出て他の家族は一同隔離所に送られましたが糞便檢査の結果其家族のうちから帶菌者即ち病にならずともコレラ菌をお腹のうちに持て居るものと輕く下痢を起したものが數人出ました、段々調べて見ると兄は腦膜炎でなく虎列剌で死亡したので法事に列なり飮食したもの數十人同症に罹つたと云ふ事であります、又千葉から來て本所停車場で發病したものがあります、此の如く四十一年の東京の流行は實に其筋道が明かに知れて居ます、次ぎに本年の東京の流行でありますが之は御承知の通是迄とは少々樣子が違ふて居りまして、まだ私には充分確かなる調べが出來て居りませぬ、然し上海から船にて門司に來た事は確かで、同地から來た船を門司で檢疫して橫濱丸「メキシコ」丸、盛運丸其他多くの船から虎列剌患者を發見して居ります。此等船中の患者、又は帶菌者が港の水中に虎列剌菌を含んで居る大便等を流す、此船に近づいて來る小船の船頭などが、此水で手や顏や食器を洗ふと云ふ樣な事から傳染する。此船頭等が一面は門司市に入つて病原を振りまく、一面は川を遡つて石炭を積みに陸地深くに入り、若松や其他の遠方迄廣げた。此の如き有樣で大阪東京と港より港、港から陸、陸より陸と、人によりて漸次東京まで來た事は確かであります。

以上御話申上げたのは文政五年虎列剌が日本に始めて入込んで以來、今日に至る迄の單簡なる流行の歷史に過ぎぬのでありますが、此事實は皆樣方にいろいろの事をお敎へ申して居るのであります。之を約めて申せば、第一に虎列剌は日本固有のものでないイツモ〳〵外國から侵入して來るのである。第二外國からは病毒が病人や帶菌者の體の內、又は船中の水などの內に伺れて渡つて來る。第三、此人々が病毒を糞便と共に港又は上陸して糞便と共に振まく。

同じ港の他の船の人が、前に云ひし如きいろ〳〵の機會から之れに罹り、之が次の港より次ぎの港と、卽ち神戸より大阪、横濱と次ぎ〳〵に蔓延せしめ、横濱より又船頭が東京に千葉にと廣げる。如此病毒は人にありて、汽車で、汽船で、小舟で、廣く傳播せらるゝ事、第四、之れ迄殆んど何年の流行に於ても漁師、船頭、其水に關係あるものゝ手に罹る。生魚殊に鰯などが東京市内の流行に關係ありと云はれ居る事。第五、大阪、東京等にては川筋に添ふて始まる事。第六、油斷をすると、安政等の如き防ぎ切れぬ大流行を來たす事があると云ふ事などは自から以上の歴史が語つて居りまして六ケ敷申さずとも虎列剌が如何なる風に傳播し、傳染し行くものであるかと云ふ事は、之れで御了解の事と存じます。

次ぎに、然らばどうしたならば此傳播をふせぎ、又各人が之れに罹らぬ樣豫防する事が出來るか、之れが今日必要の問題であります。此問題に入る前に、前から度々糞便の內に病毒(卽ち病原)がある」と申した此病原とは何んであるかと云ふ事を御話し申す必要があります。

虎列剌の病原は、皆樣が度々御聽になつた通り、顯微鏡でなければ見る事の出來ない小さな三日月の樣に、「バナヽ」の樣に少し〳〵曲つた黴菌でありまして、之れを初めて發見したのは彼のコッホ先生であります。此菌は飲食物や、菌の附た手や、器や、種々なものと共に口から人の體內に入込む、眞に口は禍の門である、口から入て胃に達しますが、胃は虎列剌に取ては一つの難所、一つの關所で、元來虎列剌菌は酸に對しては甚だ弱いものであるが、胃のなかには食物、殊に肉など消化させる爲めに胃液が分泌されてある。此胃液のなかには皆樣が鹽酸リモナーデで御承知の鹽酸が含まれてあります。之が虎列剌菌に取つては大敵で、若し人の胃が健康で、充分に此胃液が分泌されて居る場合には、折角虎列剌菌が口から胃まで入込んでも、此酸の爲めに撲滅されて仕舞ふ。然るに不養生でもして胃を惡くして置くと

菌は無事に胃を通過して小腸に下て行く。然るに都合の惡い事には、小腸の内容は虎列剌の繁殖に尤も都合の宜い「アルカリ」性で、且之を養ふ「ペプトン」等を含んで居る故に、こゝに宿を取て大に繁殖する。然し小腸が丈夫で、腸の壁の粘膜に一點の隙間もないと、盜賊が徘徊しても戸締嚴重の家には入る事が出來ぬと同然で、腸に害毒を逞ふする事が出來ずに、糞便と一緒に外へ排出されて仕舞ふ。所謂帶菌者と云ふて、おなかの裡に恐る可き菌を持て居りながら罹らずに濟むんだと云ふ倖せ者は、こう云ふ風な人であります。然し少しでも不養生をしたりして、腸胃の調子が狂ふて來ると、此懷の裡の爆裂彈は、いつ破裂するかも知れない、實に劍呑な次第であります。之に反しまして小腸が完全でない、裏門の木戸が壞れて居る、下女が勝手口のしまりを忘れて居つたとか云ふ場合になりますと、胃と云ふ交番所で、胃酸と云ふお巡査さんの眼を巡れて小腸中に忍び込んだ虎列剌菌は、こゝに繁殖し、腸壁の破れに侵入し、こゝをおかし且其體中の毒を以て人間を侵すのである。虎列剌菌の體のうちには非常なる毒がある。今此菌を澤山集めて、或る方法で殺して仕舞ふて、其僅かな分量を人間にでも、兎にでも注射すると之を殺す事が出來る。毒な、きの子を煮たり燒たりして枯して仕舞ふても、之が人を毒すると同じ理屈であります。卽ち此毒が腸壁より吸收されて、血のうちに巡つて來る、かくの如く虎列剌に侵された人は、輕いのと重い場合と種々ありまして、後に詳しく御話を致しますが、重い場合を云ふと、始め少しの下痢がありソレから盛んに吐き瀉しをする。其勢は中々熾んで、體中のありとあらゆる細胞の水分をこゝに集めて、漲ぎり落すかと思ふ程で、腹に痛みもなく米泔汁樣と云ふて、米の磨ぎ汁の樣な白い水を吐瀉する、ト云ふうちに見る／＼手足は紫色になり、冷て參り、脈も殆んどなくなつて來る。顏はやせ、眼は凹み、凹んだ眼の縁は紫色に黑ずんで來る。鼻は尖がり、頰骨は高くなり、眼は白眼勝ちになり、

人相が變つて參り、時々足のふくらはぎは痙攣つて、其痛さに堪へずして叫喚する。其悽慘の狀眼も當てられぬ有樣である。此の如くにして死するものが多く、幸にして醫療效を奏すれば治るのであります。

私の實際見たうちで、朝まで丈夫で居つて、七時半頃から二度ばかり吐瀉して九時に已に死んだものがあります。又尤も中毒の強いのでは、吐瀉もせずに突然死するのがあると申します。

以上述べました所を綜合しますると、虎列剌と云ふ劇烈な病も、肉眼で見る事の出來ぬ樣な小さな黴菌の仕業である。此菌は人の口から體內に入つて小腸を犯し、又毒を持て居つて人を毒殺する。人が口を愼んで此菌を入れぬ樣にすれば病に罹る事がない。縱令誤つて菌が入り込んでも、腸胃が理想的に丈夫であれば病まずにすむ事が出來ると申すのであります。

此事をお話し致しまして、これから吾々は如何にして此恐る可き病毒を豫防す可きかの問題に移ります。此豫防には內務省、警視廳、市役所と云ふ樣な所でする仕事と、各人各々がせねばならぬ豫防法とがあります。官廳では、例之ば支那の上海に虎列剌があると見れば、こゝを流行地と見なし、彼の地から船の來る門司等に關門を設けて、船を待ち受けて虎列剌患者なきや否やを檢查し、安全と思ふ迄船を停めて陸に近かしめぬ、之れが所謂船舶檢疫であります。此度も此法を行ふて多くの船から多くの患者を見出し、船に消毒を行ふたが、之はなか〳〵六ケ敷くて、檢疫の始まる前に已に廣がつて居つたり、或は例の露探の樣な帶菌者が忍び込んだりして來て、漸次廣がる樣になる、偖愈々病が內地に始まると、醫師から屆出でしめたり、戶別調查を行ふたりして、患者は避病院に送りて治療せしめ、其家族は隔離所に送り、跡の家や、井戶や、一切を病菌のゝこらぬ迄に消毒する、隔離所に送られた家族に就て私共がして居る豫防法を御話すると、家族の人々が隔離所に來ると、先づ著物を袋に入れ、大切な品

物と分ち封印をして消毒所に送り、人々は藥湯に入れ、髮の毛迄も殘る所なく消毒し、新しい着物に着換へさせ、一家族一部屋に收容する。其内病氣に罹つてでも居りそうな人は別室に入れて注意をし、ソレから皆々の大便を採て培養して虎刺列菌の有無を調べる、若しあつた時は帶菌者として別室に入れ、病氣の起らぬ樣無事に菌を出し盡す樣充分の養生をさせるのであります。此帶菌者はなか〳〵多くて、今年の如きは已に十人に一人位宛あるのであります。若し之れが見逃されて在つたならば、自分が病に罹るのみでなく、世上に黴菌を蒔き落らすのであります。本症の傳搬に就ては、病人より寧ろ丈夫で飛び廻る帶菌者が恐ろしいので在ります。虎列剌は感染してから五日内に起るのでありますから、五日間二回大便檢査を行ふて、無事であれば家へ歸らしむる。卽ち人々は清淨潔白な體となり、消毒された着物を着、全く消毒されて心配のない家屋に歸り、安神が出來る樣にするのであります。日に幾百の人の大便檢査を行ひ、着物から食物から、お茶菓子、碁將棋の世話迄せねばならぬ、其繁忙はなか〳〵であります。此他官廳に於ての豫防法は澤山ありますが、此位で止めて置きます。

次にわれ〳〵一個人の注意に就て御話申上げます、兎角日本人は理窟が好きで、理窟が込み入つて居て面白いと感心するが「生水を飮むな」「寢冷をするな」と云ふ樣な事では重きを置かない、然し此簡單な平凡な事柄は、理窟や實驗を煎じつめた極致で、實際上尤も必要で、效力の多い事柄であるのであります、前々から申し來た所を御考へになりますと、虎列剌に對する一個人の注意と申しますのは、一口に申すと「虎列剌の病源菌を口に入れぬ」卽ち口は禍の門口を謹めと云ふに過ぎぬのであります。此個人の豫防に就ては栗本君から御話になりましたらうから、只思ひ付た事を申上げて置きます。

第一　**生水を飮まぬ事**　海邊の川の水が場合により如何に虎列剌菌に汚されて居るかと云ふ事は、先程

歴史中で申上げた事實で、充分御解りになつた事と存じますが、其他井戸水も此際危險である、便所に近い井戸、近くで洗濯をする井戸など餘程注意せねばならぬ、一つ井戸水で多人數の傳染病に罹る事は、今日でもなほ私共の日常見て居る所であります。水道の水は大抵大丈夫でありますが、若し此菌が飛び込んだとすると、一日位は生きて居る、河水や有機物を多く含んで居る井戸水だと、數週間生存して居ります、よし菌を含んで居らぬにしても、餘り冷たい水は腸胃を惡くする、冷たい水は胃の運動を速くしすぎて、胃中の消化に都合の惡い事がある、昔の大流行などは井戸水が餘程助けをなして居るでありましう、玉川上水に毒を流したと流言があつたのを見てもソー考へられる。虎列剌菌は攝氏五十六度の溫で一時間で、又煮て沸騰させれば瞬く間に死んで仕舞ふ、ナンデモ流行の際は沸した水でなければ飲まぬと極める事であります、食器なども水道がなければ湯で洗ふと極めるがよい、一二ケ月位は小風呂を据付けても譯はありますまい。

第二　**煮たものでなければ食べぬ事**　之れも水と同じ道理であります。本年の流行も魚が大分やかましく言はれて居ります、之れは私にはまだ確とした事は申上げられませぬが、或はソーかと思ふ節もある、先頃駒込に來た一家族の如きは、家族打揃ふて鰯を食べた、ソーシテ他のものは煮たのを食べたが、主人は一杯やるので、生鰯を酢味噌でやつて、ソバに居つた子供にも一口食べさせた、ソーすると此の父さんと子供が病み出したが、他のものは無事で滯菌者すら無かつた、是等は生鰯が原因であつたと云ふ立派な證據である。又黴菌など丶云ふ事も、虎列剌がドーシテ來るかと云ふ事も知らぬ昔から、先程申上げた通り、何年の流行の時でも生魚が危險だ鰯が劍呑だと言はれて居る所を見ると、實驗上危險の事實があつたに違ひない、又歷史の時に申上げた、船頭、川の水、流行の道筋等の事實をお考へになつたら、これと極々密接の關係ある魚に菌の附著し居る、

危險の存する事は考へらるゝでありましう、理窟は兎に角として、此際刺身などは全癈して煮たのでなければ食べぬ事に極めて仕舞ひたのであります。酷に長くつけて置いたのは害はありませぬが、僅かの間食道樂は嚴禁と致したい。

第三　此際他所で飲食すること、食物の贈答等を全癈致したい　之れは詳しく說明するに及ばず、又集會の折詰、婚禮の御馳走で、虎列剌が發したと云ふ事は、皆樣が日常新聞紙等で御承知の事である。四十一年の流行に就て御話した、神田の材木屋の千葉到來の重詰など、好き例であります。又今度本所隔離所に隔離されて居る、一家族にも好き例があります、卽ち一家でお母さんが虎列剌に罹つた、三日前位からの食物を取調べて見ると、ドーモ危險らしいものは一つもない、然しお母さんと云ふ人は始終出歩いて、他所でチヨイ〳〵物を食べて來る人だと云ふ事が分つた、三越でお鮨を食べて、歸り路にソツト見廻して天金によるなどは、此邊は大丈夫ではありましうが　マア止した方が安全である。食物の贈答に就ては申上げたい事が多いが、兎に角此際は止したいと思ひます。

第四　腸胃の攝生に注意する事　腸胃攝生の必要なる事は、前に病原で申した所を御參考下さると充分御解りになります。天麩羅や、煮た松茸や木から取り立ての惡るい水をかけぬ果物には、生きた虎列剌菌は附て居らぬ筈である、然るに之を食べて罹つたと云ふ樣な事を聞くのは、ツマリ腸胃を惡くして虎列剌の爲めに門戶を開いてやつたので、言は天布羅は不注意な下男で裏門を明放なしにしたのであります。此度本所隔離所を開くので、夜十時頃大工が來て事務所で徹夜仕事をし、朝七時頃近所から精進上げを貰て來て澤山食べ、其上に御飯を充分やつた、すると、九時頃から胸が惡くなつて十二時頃から吐瀉を始めて立派な虎列剌症狀を呈し、米泔汁樣の大便のなかゝら虎列剌菌が出て來て療治してやると、翌日はすつかり癒て平氣になりましたが、此等は時

間から申しましても事實から申しましても、本所病院で傳染したのでも又精進上げに黴菌が附て居つたのでもない、前から帶菌者で居つたものが、疑ずに仕事をした上に、食物の不養生をして、發病の機會を與へられたのと思はれます。動物に虎列剌菌を飲ませて試驗をする時でも、重曹をのませ胃中の酸をなくしてからでなくては罹りませぬ。ペッテンコーフェルと云ふ偉らい學者が虎列剌に就てコッホと議論をして、ソレナラ己れが自分で虎列剌の黴菌を飲んで見せると云ふので、先生は重曹を呑んで、胃中の酸を中和して仕舞い、お弟子のインメリヒと云ふ人は先生がなさるなら私もと云ふので、「ビール」を一舛も飲んで、われから不養生をして置いて、二人ながら虎列剌菌を飲まれた、所が先生は十六時間後に輕いながらも下痢を起され、インメリヒ氏は二十時間後に可成重い病氣に罹つた、實に學者として崇敬す可き、涙の流るゝ樣な試驗でありまして、此試驗には他に深い意味のある事で先生方の方が負けた事になりましたが、腸胃がよければ免れ得る、罹ろうとするには腸胃を惡くして置かねばならぬ、と云ふ事は試驗をする時の法となつて居ります。此際不養生をしてはならぬと云ふ事の一例として申上げたのであります。

第五　**他所の便所に入らぬ事**　便所に入つても直接に大便がつくと云ふ樣な事は餘りありませぬが、戸のつまみなど危險なしとは申されませぬ、殊に手水鉢の水が危險である、帶菌者などが萬一此中に手を入れて洗つたとすると、前申した通り故甚だ危險であります、殊に停車場、集會所等の便所に注意せねばならぬ、ソーかと云ふて臭の高い石炭酸や危險な昇汞水を持つて歩く譯には參りません、ドーしたら宜敷いかと申すに他所に御出懸になる時は、七十「プロセント」の「アルコール」其二百分一位の稀鹽酸を加へ、香水瓶にでも入れて、注意を要する時に少く手の平にあけ指の尖きから萬遍なく濕らせ、暫く自然に乾く迄待て居ると充分に消毒が出來ます、薄い

からたいした事もありませんが、鹽酸で著物の色が取れますから著物へつけぬ様に注意せねばならぬ、又鹽酸なしで「アルコール」丈でも消毒が出來ます、何か香水らしく香のよいもの少々お加へになつてもよい、「アルコール」は强いからよくきくと云ふ譯には行かぬ、七十「プロセント」位が尤も有效であります、普通の一日三回分服二日分と云ふあの藥瓶は二百瓦である、あれは「アルコール」を入れ、一瓦半位の稀鹽酸を加へればよいのであります、前に申した通り必ずしも加へずとも宜敷い。

第六　**流行時には下痢に注意する事**　先程申した通り、虎列剌にも非常に輕いのと重いのとありまして、單に下痢位で濟んで仕舞ふのがあります、又帶菌者を見ますと便は多くは軟かであります。平生下痢のない人、便の硬い人が調子が變つて來たら醫師の診察を乞い、又兎に角食物など充分に注意した方が安全であります。若し强い下痢があつたらなをの事氣分など何ともなくとも醫師へ驅け付けるがよい、中毒症狀の强くならぬうちならば大變に療治が仕よいのであります。

第七　**病氣の届出でを恐れぬ事**　若し虎列剌だと大變だなどゝ、譯もなく恐れて醫師に見せぬのは自分では生命を失ひ、家族に傳染せしめ、世間にまでも害毒を流すのであると、云ふ事は前々申上げたいろいろの所を御參考になれば、自から御了解が出來樣と存じます、目下の傳染病院は、虎列剌を治療するには尤も適して居ると自から信じて居ります。隔離所もお腹のなかの虎列剌菌までをも探し出して、帶菌者をして、爆裂彈を懷て居る樣な、自分にも人にも危險なる狀態より救出す事に毫も遺憾なき事と自ら信じて居ります、自己の爲め、社會の爲め速に醫師の診察を受け、進んで届出に應ずる事を尤も必要と存じます。

第八　**下女は一家の兵站部であつて尤も注意を要するもの**であまります、此等のものには能く申し聞かせ且病氣をすぐ申出す習慣をつけをく事が必要である

なほ個人の注意さして申上げ度い事もありますが、栗本君の御話もありましたし、又餘りに細密にわたると、却て惑を生じます故、之れにて止めて置きます。一言を以てすれば虎列刺の豫防は尤も簡單である。各人が人體の理窟を知つて「口を衞れ」ばそれでよいのであります。

虎列刺菌は人間の體で他に廣がつて行く、體外に出でれば多くの場合一定の期間にて自から枯死する、誰も彼も「口を衞つて」虎列刺を入れぬ樣に注意すれば、虎列刺の流行と云ふものはないのである、一時流行しても早く熄んで仕舞ふ故に一面より考へれば一己人の注意は、虎列刺の豫防上官廳でする仕事より、遙かに效力の大なるものであります支那を征服し、露西亞に勝つた日本が、他國より襲ひ來る疾病の爲めに、屢々大なる犧牲を供し、從つて國家經濟に大損害を蒙むる事は、如何にも遺憾なる事でありまして、之れを救濟するには一家の厨房、兒女の教養等を主宰せらる御婦人方の御力をかる事が尤も必要なりと信じます。私は近時傳染病の屆出の早くなりました事、小兒などの傳染病の比較的減少いたしましたる事は、確かに御婦人方の衞生思想の發達に因する事と堅く信じて居りまして、是迄人々にも明言して居る所であります、之に就ては此御會などの御力による所大なりと信じます。往年日露の戰役に於て、御會及び愛國婦人會等が斡旋を與へられましたる以上に、此微細にして、且恐る可き、外敵征服の爲めにも御盡力あらむ事を希望致します、寧ろ御婦人相當の重大なる任務と存じます、乾燥なる話を長々と申上げまして誠に恐縮に堪へませぬ。

眼の價（承前）

附　眼の有する自然的衞生裝置

醫學博士　小川劍三郎

さう云ふ風に眼は大切である、無くては困ると申し

ましたらば、御存知の方もありませうが、中には無い方が宜いと言ふた人もある、塙檢校‥‥、此人は「群書類從」と云ふ本を編輯した德川時代の有名な文學者の一人でございます、彼の人が今のお茶の水の向ふにありまする其時分の學堂で講義をして居つた時に、夜の事で講義をして居ると、先生は全く眼が見えないが聽いて居る弟子は皆眼明の連中ですから講義の最中に風が吹いて來て、燈火が消えたので、大變困つた、何うか先生、暫く待つて戴きたうございますが、どうしてだ今燈火が消えて本が見えませぬ、誠に困りますから少しお待を願ひますと言ふと、塙檢校がさうか、さてさて眼の明いて居る者は不自由のものだと言つたと云ふのです、ちよつと聞くと負惜みのやうですが、其時には一寸尤もな話です。それでは塙檢校がさう云ふ風な事を言つたのなら、眼などは無くなつた方が宜かつたと思ふかたと御考へになる方があるかも知れませぬが、實はさうではなくて、檢校は眼の見えないことを大變殘念がつて居つた證據があります、塙檢校或る年京都に上つて、京都の縉紳家を歷訪していろいろ話をして居つた時に、南殿の櫻が盛んに咲いて居ると云ふ話を聞いたが、檢校は

眼は見えすせめて南殿の櫻かな

と詠みましたが、「なでん」は南殿にかけて「なでる」と云ふ意味にしたので、櫻が綺麗に咲いたと云ふ話を聞いても見る譯にいかぬ、せめて撫でゝも見たいと云ふので、實に氣の毒なことであります、又其時分に月見の宴があつて、大層美しい月だと云ふので、それを題にして歌を詠んで居つた時に檢校は

花なれはさくりても見むけふの月

花であれば撫でても見られるが月ではどうもさぐる譯には行かない、此の畫のやうに水に映つた月さへも掴むことが出來ないのであるから空にある月はいくら手を長くしてもつかむことは出來ない、「名月や座頭の妻のなく夜哉」大變に氣の毒な歌でございます、矢張り其時分の話ですが、檢校が富士山の話をいろ

いろ聞いたものですから非常に歎息して、

　月花はさしてそれとは思はねど
　　富士とし聞けはなみたこほるゝ

と詠まれた、月花は見なければ見ないでも宜いが富士は日本の名峯であつて日本の精粹が集つて居ること云ふことを聞いて居るので、富士と云ふことを聞くと涙が溢れる、富士だけは一眼でも見たいと云ふ歌であります、尚ほ塙檢校の配偶の方にも檢校の眼が見えないのを歎息した。

いろ〳〵述懷の歌などがあります。

檢校が講義の時に、偶々燈火が消えたのを眼の見える者は不自由だと云つたから檢校は眼の見へないのに悅んで居つたかと云ふに決してさうではないのです、杉山檢校の樣にせめて一目でもほしかつたらふと思ひます。

では眼の價はドノ位だらふと云ひますと、始めに此頃では四五千圓を申しましたがそんな廉いものでは決してありませぬ、到底さう云ふ風な値打を附けることも出來ず、幾らでこうすると云ふことも出來るものではない、要するに眼の價と云ふものは到底估るべからざるものであつて幾らと云ふ價を附けることの出來るものではないのであります、さて、世界中何より大切な命と同じ價とでも申しましやうか。

さて、これだけでは詰らない話であつて、いろ〳〵な事を言つたけれども唯眼が大切だと云ふだけになりますから、少しばかり、それほど大切な眼であつたならば、自然と申しますか神樣と申しますか、人間の眼は自然に何う云ふ風に出來て居るか自然的にどふいふ衞生裝置を持つておるかと云ふことに就て即ち「眼の有する自然的衞生裝置」といふことを少し許りお話しやうと思ひます。

さう云ふ風に眼が大切なものであつたならば、體の方にも其大切なものに相當した設備がしてなくてはなりませぬ、それで眼の一番大切である證據は、人の體が卵から段々に大きくなつて參ります時分でも體の中で一番早く發育し始まつて、さうして一番遅

くまで發育して居るものは眼である、體の中で眼は大きな部分を占めて居る、身體がすつかり出來上つてからの眼は小さいものであるけれども胎兒の時分殊に初め發育しかゝる時分は實に大きなものであります、さうして出來上つたは(圖を描きて示す)之を角膜と申しまして、此處に睫毛があり、是が眼がしら、是が眼尻、此處に眼球があつて、之を「しろめ」、之を「くろめ」と申します、此中にあるのを瞳孔「ひとみ」と云ふのです、或は「めぼとけ」と申します、瞳孔の瞳の字は目の偏に童と云ふ字が書いてあります、何故斯う云ふ字が出來たかと云ふと、人と人と向ひ合つて向ふの眼を見ますとこちらの顏が向ふの瞳孔に映つる、今では映ると云ふことを知つて居りますが以前は知らなかつた、小猫の顏の前に鏡を出しますと自分と同じやうな猫が見える、後ろへ廻つて見ると居ない、前へ來て見ると此處に居る、また後ろに廻つて見ると居ない、終ひには癪に觸るか怒ります。是は全く自分が映ることを知らないので、人間も以前は猫のやうな時代があつたと見へまして、向ふの眼の中に小さいものが居る、皆様がお隣りの方を御覽になれば分りますけれども小さな人間が見える、そこで目偏に童を書いて瞳と云ふ字が出來た「ひとみ」と云ふのは人が見えると云ふことであります、日本では昔は俗に人見と書いたのであります、又向ふの眼の中に小さなものが見える、佛様のやうなものが見えると云ふので、眼佛とも申しました、佛様のやうに、粗末にしてはいかぬ、此處を俗に「くろめ」と云ひますけれども此部分を角膜と申しまして透明な硝子のやうに膜が出來て居つて少し高くなつて居ります(圖を描きて示す)眼球は斯う云ふ風になつて居つて、此處の部分が角膜であります。

さうして澤山の神經が來て居つて少しの物が行つても鋭敏に感ずる、身體の中で一番餘計に感じます、外科の方で手術をする時分には「コロ、ホルム」とか「エーテル」とか云ふやうな藥を使つて全身麻醉をさ

せるのでありますが、其時分に他の神經が段々きかなくなつて、一番終りに角膜の神經がきかなくなる、皆様は御覽になつたことはありますまいが、全身痲醉がかゝつたかかゝらないかと云ふことを見るには眼瞼を開けてちよつと角膜を突いて見る、突いた時に瞬をしなければ痲醉がきいたと云ふ證據になる、此角膜には澤山の神經が來て居つて大變鋭敏なものであります、其證據にはちよつとした物が行つても眼を塞がうとする、是は一つの保護装置と云ふものであります、神經が澤山あつて反射機能で腦の方へ行つて、劍呑だから眼を塞げると云ふので眼を閉ぢる、非常に鋭敏に出來て居る、反射運動といふのは何處か蚊がとまりますと眠つて居つても現の中に蚊を拂ふ、それが反射機能であります、ちよつと蚊がとまると、それが頭に傳わりてどこそこに敵が來て居る、蚊がとまつて居るからそれを追ひ除けろと命ずる、それを反射機能と云ふのでありますが、其反射機能の大變著しく發達して居る、それが爲めに小さい物が來ても直ぐ眼が閉ぢる、閉ぢるばかりでなく、同時に涙が出る、涙と云ふのは（圖を描きて示す）眼の此處の所に涙の出る源がありまして、其處から出て來る丁度人間にすると水道上水のやうなもので、其處から直ぐ水が出て來て、此邊をすつかり洗ひ去る、微菌が入り埃が入ると涙が出て來て洗ひ去る、洗つた水はどうなるかと云ふと內眥より少し距たつた所の眼瞼縁に涙點と云つて小さな穴がある、俗に涙孔と云ふ所でこゝから涙は吸ひ込まれて骨の中を通つて斜めに鼻に入る、能く世間では悧巧な人を眼から鼻に拔けると言ひますが、悧巧には限りませぬ、私のやうな者でも矢張り眼から鼻へ拔けて居る、風を引くと鼻が詰りますから、鼻をかむと此邊（涙點）から涙が飛出して來る、さう云ふ風に涙で洗ひ去る裝置がありますから、下水と同じことであります、上水と下水とは大變病氣に影響するものでして、東京でも上水下水の出來ぬ前と出來てからとは非常に市の衞生狀態が違つて來た、此上東京の

下水が完全になれば病氣が大變に少くなるでしやう所が眼の方では上水下水とを性來に有つて居る譯であります、其他にまだ面白いのは、何か入つた時に洗ひ去る爲に出るのは少しも差支ありませぬけれども、悲しい事があつたり、嬉しい事があつたりした場合によく涙の出ることがある、下水でも勝手許の流しの水でも一遍にどつとこぼすと溢れて仕舞ふ、涙もさうで、一度にほろ／＼出て來ると、あの人は泣いて居ると云ふ風に眼から溢れて頰にまで傳はつて來る、所が何所でも傳はるのでなく、或程度までは頰に傳はらなくても濟みます、それはどうしてかと云ふと眼の緣、眼瞼緣と申します所に脂が出て居ります。

（圖を描きて示す）眼瞼を縱に切つて見ますと斯うなります、是は前から見た圖ですが、此眼瞼の緣に睫毛が生へて居ります、此處に始終脂が出て居る、其爲に涙が外へこぼれないで濟む、斯う云ふ風なコップへ水を注ぎますると水が直ぐ溢れるけれども此緣へ何でも宜しい油を附ける、油を塗つて徐かに水を注ぎますと、水がコップより高くなる、私共が子供の時分に手品の本に水を高く盛る法と云ふのがあつた、それは容器の緣へ油を附けるのです、鼻の脂でも何でも塗つて置くと水が少しもち上る、それと同じに眼瞼の緣にも脂が出て居るから涙が少し許溜つた位では溢れて來ない、あなた方のやうに大きくなつたら何ですけれども、小さい方で今にも夕立が來さうだと云ふやうな風に眼の中に一杯涙の溜つて居るのを御覽になるでせうが、あれは脂で支へられて居る、それが脂で持切れぬとこぼれて來る、さう云ふ風に脂があるから少しは顏の美も保てると云ふもので、脂が無かつたならば少し溜つても外へ出て見にくゝて仕方がない。

尙ほこの涙液は黴菌を殺す働がある、之を殺菌作用と申します、眼を開いて居りますといろ／＼な黴菌が風や埃と一緒に入つて來る、入つて來るから或程度までは涙が働いて其黴菌を殺して仕舞ふ、さう云

ふ働きをするのであります。

又もう一つは眼は斯様に大切なものでありますが、其大切なものを我々はどういふ風に使用するかと云ふと不用の時は机の抽斗に藏つて置く、それでも劍呑だと思つたらお母さんに賴んで簞笥の抽斗に收つて貰ふ、さもなければ金庫の中へ藏つて貰ふ、倉の中へ藏つて貰ふと云ふ譯には行かない、大變大切なものであるけれども家へ歸つたら戸棚へ藏つて置いて、要る時だけ使ふと云ふ譯にはいきませぬから、其爲に此處に骨があります、此骨の部分で箱のやうになつて眼を包んで居ります、さうして其箱…眼窩と申しますが……の上の部分が餘計出て居ります、前に申しましたやうに、ちよつとした物が來ても**眼瞼が閉ぢる、眼瞼が閉ぢる時分には眼球が上の**方へ向く、眼の中で一番大切な角膜「くろめ」の部分を上の骨が隠くす、こうすれば危險に接することが少くなるから上の方が餘計に發育して丈夫な壁が出來て居る、内側には鼻がありますから怪我をする事は少ない、これで其眼の怪我をした者の統計を取つても、一番外の方が多い、上の方とか下の方とか、内側とかの方から來る怪我は少ない多くは外の横から來る、横は骨が缺けて居る、指で探つて御覽になれば分りますけれども外側は眼球の後ろの方まで指が屆く外の方は骨が缺けて居りますからどうしても傷をうけることが多い、若し外側の方ももつと骨が高くなつて居りましたならば眼の保護裝置としては大變良いのでありますが、其代り馬車馬と同じて戸外を歩くには大變都合が惡い、前ばかり見て歩けば宜いのですけれども、右を向ふと思つても、左を向ふと思つても先づ身體から向かなければ見えないと云ふので不自由です、詰り人間が平生生活して行く**上の必要から眼は兩方にあつて横に附いて居る**、さうして外の方の骨が缺けて居るのでありますが、其爲に傷もうけ易いと云ふことになるのでありますが、この位のことは致し方がないと思はねばなりません、日本人には餘りさう云ふことはありませぬ、

殆ど無いでございませうが、露西亞人には大變多いので喧嘩します場合に拇指を外方で眼球と骨壁との間に突込む、何だつと云ふて拇指を突込むのです、突込むと眼の球が飛出す、眼球が前方に出て來たら尚ほ能く見えさうなものですが、眼球を出されて仕舞つては能く見えると云ふ譯には行かない、大變に困ります、日本人も煙管を持つて居る時分には隨分煙管で眼を突いたと云ふこともありますが、露西亞人が特別に狙つて外の方から指を突込んで脫臼させると云ふのとは目的を異にしております。

ですから外の方が防禦する裝置が少しく缺けて居りますが、其外に於てはいろ／＼の害に對して防禦裝置が來出て居る、自然的衞生裝置が備はつて居る。

前に申しましたやうに眼の價は大變に貴いものであつて眼には、何物も替へられぬと云ふ位貴いものである、且つ生れながらにしていろ／＼な外からの危害に對して防禦する裝置が出來て居る、自然的にさへ相當なる衞生裝置が出來て居るのであるから、其自然に有つて居る裝置の上に、人間が少し人工を加へ、それに對する衞生の事に氣を付けたならば、價の知れない位大切な眼を一生の間十分に使ふことが出來る譯であります。

それで自然にそれ程の裝置がしてあるならば、其上に吾々はどう云ふ風に注意したならば眼の衞生に適ふかと云ふことを申しますと大變問題が大きくなりまして眼の病氣に依て衞生の仕方も違つて來るのでありますし、もう御約束の時間も過ぎた位でありますから今日は是で御話を終りまして、若し又御望みがあれば他日「トラホーム」とか「風眼」とか「そこひ」とか一々の眼病に就て御話する機會がありましたらその折りに衞生のことも御話いたすとして今日はこれにて御免を蒙ります。

叢談

葡萄療法

現今の醫學社會に於きましては、もはや療法としては、別段價値を置きませぬが、從來葡萄療法と云ふ事が御座いまして、特に歐羅巴諸國で行はれます。療治を致しますのには、先以て確實な診斷がつかなければなりません、尚ほ其人の體質、個人性、其他の狀況を熟察した上でなければ、決して適當な療治の出來る筈はない、又爲すべき事でありませんから、皆樣に所謂素人療治を御勸め致す譯では御座いませんが、昨今は丁度葡萄の盛りで、何處の果物屋にも美事な葡萄が見えて居りますから、葡萄のお好きな方々には、何かの參考にもならうかと存じまして、思ひつきましたまゝに、此事を少しく申上て見やうと思ひます。

療法的に葡萄を用ひますのは、その殼や種子は消化致しませんから、勿論その汁の效能であります。葡萄の汁は其の主成分たる水の外に、葡萄糖、酒石酸カリ、酒酸カルク、游離の酒酸類、蛋白體、鑛分殊にカリ、硫酸、石灰、マグシチヤ、鐵、亞酸化マンガン、タルキウム、越幾斯分及び少量の色素を含むで居ります、時としてタンニンを含むで居りますが、これは後で混じたもので、皮種子又は梗などの碎かれたものから汁の中に入つたものであります。

葡萄汁千分中に含まれて居るものゝ平均含量は左の如くなつて居ります。

水	七六〇乃至八四〇
糖	一〇六乃至三三〇
游離酸	三・五乃至一〇・二
蛋白	五・〇乃至二〇・〇
ペクチン其他	二・五乃至三〇・〇
鹽類	二・〇乃至四・〇

此中で最も大切なのは葡萄糖で御座いますが、これは、葡萄の產地に依て大變その含量が異ります、又氣候の關係でも異つて參ります、即ち氣候が乾いて溫かなれば糖の含量が多く甘くなる譯であります。兎に角葡萄汁の中に最も多量に含まれて居るのは葡萄糖で御座いまして、プロテイン質や、灰分は少ないのであります。今若し一日に三キログラムの葡萄汁を用うると致しますと、三〇四〇乃至三三六〇瓦の水、四一・四乃至一三二・九瓦の糖、一四乃至四〇・八瓦の酸、一五・〇乃至六〇・〇瓦の蛋白が體內に取入れらる譯であります。それでありますから、適當にこれを食用する時には、多少榮養の效もあり、特に腎臟や腸の排泄作用を善くすると云ふことは明かであります。少し詳しく申しますれば、中等量(一日三十キロ)の葡萄を法則通りに食用すれば、淸凉止渴の效があり、腎臟の機能を興奮せしめ、食慾を進め且つ腸の機能を高める作用があります、他の食物を廢して葡萄療法を行ひますれば、催下の作用を呈して、全身の榮養は減降致しますが、之に反して强壯食餌と葡萄療法を適度に併用する時、著しく體重を增し全體の榮養が佳良なつて參ります。これは試驗上、多量の肉類と少量の葡萄糖にては、體量を維持するに足りませんが、肉をこれよりも少なくし葡萄糖を多く致しますと體重が增すのを觀ても解かります、ビショヨフと云ふ人とフォイトと云ふ人の行つた試驗で見ますと、五〇〇瓦の肉食、一〇〇瓦の葡萄糖、三七・九瓦の尿素排泄にて體重減損二三〇瓦五〇〇瓦の肉食と二〇〇瓦の葡萄糖、三五・五瓦の尿素排泄にて體重減損二三瓦、四〇〇瓦の肉食と、三〇瓦の葡萄糖、三二・七瓦の尿素排泄にては體重增加九二瓦と云ふ成績が出て居ります。

それで葡萄療法に依て身體器官の構成を促し、榮養狀態を高めやうと致しますには、相當に葡萄を食し(一日平均二キロ)、又窒素に富める(肉類)食物とを配合し、尙ほ消化器が葡萄療法に堪へ得るだけの健康の狀態にあることが必要であります。又これに用

ひます所の葡萄は、葡萄糖の含量に富み、酸味の少ない種類のものでなければなりません。

少量の葡萄を用うる所の食餌療法は、如何なる病に適當であるかと申しますと、先づ腺病、貧血、羸瘦等榮養の衰へた人々、恢復期、熱のあつた後、諸種の體液損失に依る衰弱の後、諸般の皮膚病、慢性僂麻質斯、悪液質、下痢、萎黄病及び貧血に因る月經異常等に宜しいのであります。併しこれも溫泉療法と同様で、葡萄などの良く熟する療養地の氣候が好いと云ふことも大に其效を增すのであります。食餌は肉食を主として、フエット、バタ、肝油などをも併せ用うるやうに致します。

之に反して葡萄を多量(一日平均四キロ)に食し、又稍や酸味の多い種類を用ひますのは、腸の働きを催進して、所謂お腹を少し緩める目的に宜しいのであります。それでありますから門脈鬱血、下腹部の充血、痔疾、便秘、ヒポコンドリー、又鬱血の結果として起る所の呼吸器の慢性加答兒などに適應して居る譯であります。若し催下性の鑛泉療法の後療法と云ふ如き意味にて葡萄療法を應用致します場合には淡泊なる食物を選み、肉食を避け、脂肪を制減するが宜しいのであります。

右に述べました如く、葡萄療法は兩様の使途があります、卽ち肥る法に、瘦せる法と云ふた具合に二通の應用法がありますので、之に依てそれ〴〵適應症がある譯であります。昔は肺癆にも效があるやうに云ふたことがありますが、これは全く理由なきことで、反對に大に害を招くことが御座います、卽ち消化機を害して容易に下痢を起さしめ、加之ならず喀血を來すことがありますから、これに宜しくありません。

扨て實際に葡萄療法を行ふには何うするかと申しますと、一日數回患者の堪へ得るだけ食べさせるのでありますが、最初は先づ三百乃至五百瓦を一日量と致しまして、それから其人と療法の目的次第で段段量を增して七百瓦、千瓦、千五百瓦、二千、三千、

四千瓦までを一日に食用させるのであります。而して其の食べる方法は、早朝空腹の時に一日量の半分を食用致します。若しこれに堪へない時は、豫め通常の朝食をして一時間經てこれを食します。此療法の初めに、空腹時に食する時には葡萄のみ用ふることの出來ない場合がありますから、此時には麵麭の皮を少々同時に食べて宜しいのであります。若し空腹で食べることが出來ましたならば、其後一時間過ぎて朝餐を取ります。それには麵麭、茶、咖啡、肉羮汁の如きものを用ひ、次で新鮮の空氣中で適宜の運動をなし、殘餘の半分は午餐前に食し、其の餘は晩餐前に食するやうに致します。或は又朝空腹時に一日量の半分を食し、其の殘餘を三分して、一分は午餐前に食用せしめ、午餐には少量の食物を與へ、他の一分は晩餐前に食用せしめ、次で普通の食を取らしめ、殘餘の一分は臨臥前に食用せしむるも宜しいのであります。

此の療法に用ふる葡萄は、顆が大きく、皮薄く、核が小さくて少なく、芳香甘味を有し、液汁は水ぽくなく粘稠なものを選ばなければなりません、時季は恰度葡萄の熟する時でありますから地方に依て八月から十月迄の間で、少なくとも五、六週間續けるのであります、歐羅巴には方々に有名な葡萄療養地が御座います。

これにて大體葡萄療法と云ふものを御紹介致したのでありますが、更に簡單に批評を加へて見れば、葡萄療法は右に述べました通り一キロ乃至四キロの葡萄を空腹時に皮と核とを除いて食し或は同量の葡萄の汁を療法の規則に從て食用するのでありまして、其の效能のある物質としては、一キロの葡萄にて大約一〇乃至三〇瓦の糖と三乃至一〇瓦の植物酸を攝取し得る譯でありますが、此の酸で以て前の糖を取るに堪ゆるのであります。理論上から申しますと、斯樣な榮養法に依て良效あるでありませう。併し何時でもと云ふ譯ではありませんが、通常最も目に立つのは催下の作用で御座います。これは無論その

量にもより、葡萄の性質又清潔如何にも依ることでありますけれども、消化障碍を起すことが稀でない、これは酸と糖の、量が多いか或は葡萄の不潔に出るのであります。それで、善良の葡萄を適當に食用すれば、諸種の腸疾患(便秘)に對して用ひても宜しい、或は必要でありませうが、有力なる葡萄療法を實行するには、先づ以て胃が強壯で、消化機が善く、猶體質が健全であると云ふ條件がなければなりません。要するに療法など〻云ふ六ケしい事でなく、好きな人は召上つて種々の效能がある、只食べるに就て、右の如き葡萄療法の理論を參考すれば、種々爲めになることがあらうと云ふ位のことに過ぎないのであります。

旅の衛生

何事によらず自分一個の經驗を積むには、度々其機會がなければ出來ないことでありまして、旅行の如きも慣れた人と慣れない人とでは萬事にかけて大に違ふものであります。婦人は比較的旅行することが少いので、いざこれから旅行をしなければならぬと云ふことになりますと、隨分狼狽して不必要品を澤山に携へたり、必要品を取落したり、其他直接間接に衛生上の注意を缺くことになり易いやうでありますから、分りきつた事のやうながら一通り旅行に就ての注意を申上げて見やうと思ひます。

旅行を致して見まするに、『旅の恥はかき棄て』とか申す諺を實行致すものと見えまして、隨分旅客仲間には無遠慮な人々もあるもので御座います、併しこれは人樣ばかりではない、誰しも多少斯樣な氣味のあるもので、家に在てはまさかしそうもない無作法を得てし易いものであります。例へばプラットホームや客車の中でさへも所嫌はず唾を吐くと云ふ如き種々斯樣なことが演ぜられる、それで旅行には衛生上效もあるが又なか〱危險も多いのであります。先づ旅行を致しますのには夫々旅行の目的があり、

豫定の日取がありませうから、之に依て用意も異る譯であります。卽ち目的と云へば千差萬別で、職業上の旅行、研究的の旅行、遊散、保養、湯治等の爲にする旅行も御座いませう。時に就ては、旅立の仕度、旅行中、旅行後、卽ち行先に到著してからの三期に區別することが出來ます。

目的が種々違ひますから、從つて用意も種々異ならなければなりませんけれども、併し何れの旅行にも共通して居る必要の用意があります。例へば身體並びに衣服の淸潔を保つ上に就ての用意も其の一つで御座いますが、何處へ參りましても水や洗濯桶位は有りませうけれども、其他の物は携帶しなければならぬと云ふ譯であります。

第一に手荷物に就て考ふべき二三の注意を申上げて見ますれば、「是非無くてならぬ物だけを携へる」と云ふことを原則としなければなりません。それでも御婦人方は、之も要る、彼も有る方が宜い、此が無ければ不體裁だと云ふ風で、兎角荷物がかさばりますから、よく／＼必要の品だけを用意するやうにしなければなりません。普通の旅行にもお嫁入の時のやうに何も彼も携へることになりますと、荷物の上げ下し、其他萬事につけて荷物の邪魔になることは實に想像の外で、荷物の御供について來たやうなことになり、遊散がてらの旅行も却て之が爲に不快にされ、用向も敏活を缺き費用も多くなり、目的を妨げることになります。カバンは其向々に依て近頃は頗る實用的に出來て居りますから適當のものを選むこと〻致しまして、先づ身體の淸潔、衞生に關する入組品を數へて見ませう。

第一に石鹼と海綿、併し海綿は便利は便利で御座いますが、却て不衞生的になり易いから、除いても宜しい。石鹼は金屬或はセルロイド製の箱に收める。それから消毒脫脂綿を少々、楊子齒磨。便所用の紙、これは大切であります、田舍の小さな町などに參りますと、便所は不潔で、又紙も善いものがないので隨分困ることがあります。尙ほ護謨製のイルリガー

トルを携へれば、便秘其他の場合に種々應用することが出來ます。次に櫛、刷毛、其他の化粧道具も携へなければなりますまいが、これも木や革で一色うまく收まるやうに出來て居るものがありますから、それなれば餘り邪魔になりません。さうで御座いませんと亂雜になり、又油や粉が大切の著物を汚すことが往々ありますから氣をつけなければなりません。倘ほラノリンを少々、アルコールを一罎、英吉利絆創膏を僅かばかり携へ度いものです、これは殊に靴を穿く人には缺くべからざる品でありまして、稍や長距離の徒歩旅行をしなければならぬ場合には、足の擦れる部分にラノリンを少々塗り、宿所に著いたならば、足を清潔にしてアルコールで拭て置けば靴傷を免れます。其他アルコールは手や足の一部を消毒する用にもなり、種々の便利があります。繃帶材料は餘程邊鄙の所に行く場合でもなければ餘り必要はありますまい。宿屋などに著いた時分に著物や靴の掃除は是非しなければなりませんが、往々自分でやらなければならぬことがある、それで羅紗刷毛や靴墨も必要である。

衣服類に就ては、可成簡單に其季節相應の衣服を著ることは勿論でありますが、倘ほ寢卷を一枚、それから何れの季節でも寒くない著物を一枚携へることが必要であります。山地、其他急激の氣候の變化に依て、現在持合はせの著物にては堪へ得ぬやうになることは屢々あることで、熱帶地方でもあることであります。斯樣なことから人の著物を借著せねばならぬことになり、さもなければ忽ち寒冒に罹り、或は中途にして旅行を止めねばならぬと云ふやうな事は隨分ありがちのことであります。著物ではカバンを塞いで困ると云ふ場合には、適當の下著を一枚多く携へることにすれば宜しい。靴下やハンケチは餘り儉約にしない方がよい。靴を穿くならば、これは十分注意して撰ばなければなりません、可成新しい靴でない、平生穿き習らした靴を用うるのが安全です、新しい靴を穿いて少しでも足に合はぬ場合には

迚も長く歩けるものではありません。次に雨傘、ステッキ、水を通さぬ外套も必用の携帶品であります。

以上舉げましたゞけでも、かなり澤山の品數で、これを何う云ふ風に始末してカバンに收めやうか、これ又なか／＼厄介なもので、此れに就ても二三の注意すべき事柄が御座います。

凡て旅仕度は可成簡單に而かも萬事間に合ふやうにと云ふのが主眼でありますが、それには又一定の秩序がなければなりません、彼の軍隊に於て兵士が行軍する時の武裝は全く此の原則に基いたもので、一つも無駄な物がなく、一つも足りないものが無く、可成邪魔にならぬ様に、且つ之を使用するにも秩序整然と法式が定まつて居ります、普通吾々の旅行にも此の流儀を應用するのが最も便宜である。兵士の背嚢內の入組品は矢張行軍の目的に依て異りますが、此の背嚢に相當するのが吾々のカバンであります。それから肩から掛ける雜嚢と云ふものがありまして、此中には楊子、歯磨、紙、靴傷豫防の膏藥、手拭の如き毎日使ふものが入れて有ります、吾々の旅行にも此の雜嚢の如く、日用品は小さな手提カバン又は信玄袋のやうな物に入れて携へるやうにし、著物、襯衣の如き大きなものはカバンに詰めるやうに致します。兵士の背嚢の內にはシャツ、ズボン下、それから手入袋と申しまして羅紗刷毛、洗濯刷毛、靴毛刷、靴墨から錐、絲卷、針、鋏に至るまで收めてある袋が入れてあり、尙ほ用意の爲の米或は麵麭の如きものまで一切のものが整然と入れてあるのであります、凡て斯様に行儀よくきちんと內容品を入れてあれば、少しもカバンの內をかきまはすことなく、何時でも用に應じて直ぐ其物を取出すことが出來ます、若し亂雜に詰めてありますと、いざと云ふ時には小さなカバンの內でも何處に入れてあつたか、なか／＼捜せない、周章てゝ肝癪を起して徒らに掻廻はすやうなことになるものであります、カバンに詰めますには一側に著物を入れましたならば、

其の對側に襯衣を入れ、なるべく隙間の出來ぬやうに、持運びに際してがたつかぬやうに詰めなければなりません、又著物はなるべく皺の寄らぬやうに、裏の方を外にして入れ、靴の如きものは紙或は別の袋に收めてしまひます。

若し二三人一緒に旅行する時にもカバンは銘々携へる、夫婦と雖も此の規則を守るやうにした方が宜しい、共同に致しますと、經驗上實際種々の不便を感じ、互に不平を起し易いものであります。

これにて大概旅行の準備が出來たものと致しまして、旅行の目的、計劃、凡そ豫定が立て居りますれば、直ちに旅程に上ることが出來ます。

（以下次號）

耳の攝生（承前）

五、耳と外の病氣と　他部の病氣との關係、これは甚だ複雜でありますが、其中で直接に關係をもつて居りますものは、鼻、咽腔及び口の病氣であります、即ち鼻がつまりまするとか鼻汁が澤山出る樣な病氣に罹りますれば、歐氏管の粘膜も腫れまして、其の爲めに空氣は歐氏管を自由に出入する事が出來なくなります、然る時には耳鳴りが起つたり、耳が遠くなつたり致します、風をひいて鼻がつまる時に耳が塞がつた樣に感ずるのは、時とすると此の爲めである事があります。

それから、咽頭の病氣では咽頭炎が歐氏管に傳はる事もありますが、子供で最も屢々耳の病氣を起すのは扁桃腺の大きくなる病氣であります、扁桃腺が大きくなつて居る子供は中耳カタルといふ病氣に罹る事が多いのであります、之れは知らぬ間にだん／＼と耳が遠くなるのでありまして、十歳前後の子供で耳が遠くなりましたなら、多くは扁桃腺から來て居るものでありますから、其の治療を施さねばなりません。

扁桃腺の腫れる病氣はまた「みゝだれ」を起す原因と

もなります、且つまたそれが一時なほりましても、度々再發し或は慢性のものとなる傾きがあります、引き續いて何度も中耳炎に罹りますれば、其度毎に鼓膜は多少害せられまして、遂には全治する事が出來なく、聽えも滿足でなくなります。

齲齒、口の中の病氣で耳に關係のあるのは第一に齲齒であります、卽ち齲齒の爲めに甚しい耳の神經痛が起りまして二三日間飮食も出來ず、眠る事も出來ずに苦しむ事があります、また齲齒は鼻の病氣の原因となり、それより間接に耳を害する事もあります。

胃病と耳　其外には胃の惡い患者には烈しい耳鳴りが起る事があります、之れは耳を療治してもなほりません、まづ胃病を療治してかゝらなければならぬのであります。

婦人病と耳、婦人の月經、妊娠などの時にも烈しい耳鳴りが起る事があります、之れ等も婦人科の方で治療されねばならない病氣であります。

初生兒の耳の注意　初生兒及び哺乳兒では胃腸の病氣は中耳炎の原因となる事があります小さい子供は胃腸が惡いと容易に乳を吐くものであります、此の吐乳といふ事は小さい子供は注意すべきものでありまして、乳を吐く際に吐き出すものが總て口へのみ出る時には心配ありませんが、多くはそれが鼻へもまはるものでありますから、其の一部が歐氏管より中耳にはいつて中耳炎を起すのであります、なほまた胃腸の病氣が中耳炎の爲めに起る事もあります。

乳兒ではまだ氣管枝炎、肺炎などゝ申します病氣が中耳炎を起す原因となる事があります、肺炎で熱が非常に高く腦膜炎の樣な病氣になる事ありますが、之は多くは中耳炎が起つた爲めであります

生後未だ日數をたゝぬ赤子卽ち初生兒の耳は成人の耳と多少異なつて居ります、外耳内耳は大なる相違がありませんが、中耳及び鼓膜の樣子は大に相違して居ります、其れ故中耳炎を起し易く、また其他の耳の病を起し易いものであります、それ故最後に初生兒の耳の攝生を特別に附け加へて置きませう。

兒垢、初生兒の外聽道は非常に狹いものでありまして、且脂肪の樣な所謂兒垢といふものを以て塡塞されてあります、此兒垢と申しますものは子供が胎內にある時に出來た皮脂でありまして、全身の皮膚に附て居る脂であります、それが外聽道の皮膚にも出來て居りますが、長く取れずにありますれば、外聽道の病氣を起し、或は鼓膜の病氣を起し、中耳炎を發するに至ります、故にこれは注意して洗ひ取らねばなりません、併し時として洗つた爲めに却て外聽道に腫物などを生ずる事がありますから、洗ふにも濫りにしてはなりません。

初生兒の耳の保護、初生兒の耳はまだ軟かでありますから、容易に形が變るものであります、例へば帽子などの爲めには壓し附けらるゝ事もあります、子供が出產してまだ間もない間は東洋でも西洋でも頭巾を被らしむる習慣がありますが、其の頭巾があまり小さい時には、耳を壓しつけて爲めに外聽道の腫物其他の病氣を起す事があります、通俗では之れをクサと申しまして、胎毒が出るのであるからと曰ふて悅ぶ人もありますが、大なる謬りであります。

凍傷、初生兒の耳翼はまだ凍傷に罹り易く、少しの寒に遭つても凍傷に罹り、甚しきは腐れ落ちる事があります、それ故寒い日は注意して寒い風にあたらないやうにせねばなりません。

汗疹、まだ、熱い日には汗が出まして、耳の附け根の所がたゞれたり、また汗疹が出來る事があります、されば夏の日は耳の周圍を淸潔にして、毎日淸水で拭くか、或は酒精で濕した布片で拭く事が宜しく、若し汗が出ましたならば、たび〳〵之れを拭く事を忘れてはなりません、そしてたゞれたり、汗疹が出來たりしましたならば、澱粉、亞鉛花、或はあせとり粉などをふつて其所を乾かすやうにせねばなりません。

高い音響、小さい哺乳兒は總て感じ易いものでありますが、音響にも感じ易く、高い音、強き響などは初生兒の鼓膜を強く刺戟し、幼兒の疲勞を來し、

精神を過度に刺戟する爲め其の發育を妨ぐる等恐るべきものであります、甚しきものにありましては聽力も減じまして遂に聾になる事もあります、それ故初生兒の近邊ではあまり高い強い音をたてぬ樣に、また氣笛、雷鳴の如き強い音には手或は綿にて耳を庇護してやる事が必要であります。

入浴　初生兒の入浴、我國では大人でも、子供でも度々入浴を致しますが、之れは非常に良い習慣であります、併し、初生兒の入浴の際少し注意しない時には、頭、顏などを洗ふ時に浴湯、石鹸、塵芥汚垢等を混じたる水が外聽道に這入る事があります、若し、それが長くはいつて居ります時には外聽道鼓膜等に強い炎症を起し、更に中耳炎を起す事もあります。故に初生兒の入浴の後には必ず外聽道をよく拭く事を怠つてはなりません。

乳哺の注意　初生兒に哺乳する時にも乳が耳の中に流れてはいる事があります、殊に「添へ乳」と稱しまして、初生兒を仰臥せしめて授乳する習慣は宜しくありません、此時乳兒は充分に哺乳してから乳房を放し、其の乳房から流れ出る乳汁は外聽道に流れ入るのであります、また澤山に飲み過ぎた乳を吐き出して、それが流れて耳にはいる事があります、斯くして耳に這入つた乳は腐敗しまして耳の病氣を起します。

また哺乳の折に咳嗽をしたり、嘔吐をなしたり致します時には乳が歐氏管より中耳の中にはいる事があります、それ故哺乳は常に嚴格にして、添乳などは全廢せねばなりません。

耵聹　初生兒の外聽道は兒垢をもつて居りますが、少し日を經るに從つて兒垢は除き去られ、其跡に耳垢（耵聹と申します）が出來ます、時とすると之れは堅く固りまして、耳を塞いでしまふ事があります、併し中には軟かなのがありまして、みゝだれのやうに飴の樣なものが始終流れ出るものもあります、みゝあかは外聽道の皮膚や鼓膜を傷け、其の病氣を起し、耳痛、耳鳴、眩暈、卒倒等を起す事があ

ります。

みゝあかを取るには大人では尖端の鋭くない耳搔きで取れば大抵差支ありませんが、初生兒や、乳兒では外聽道が狹いから、耳搔きなどを入れる事は禁物であります、之れは一定の方法の下に從つて取らねばならないものでありますから、醫者に依賴するのが最も安全であります。

我國ではあまり見ませんが、西洋では子供の耳に接吻して鼓膜を破る事が度々あるそうであります、之れに反し我國では子供を可愛がる時に頭を輕く拍打する習慣があります、此際若し耳を拍ちましたなら、接吻と同樣に鼓膜を破る事があります、注意せねばなりません。

育兒

小兒下痢の豫防法

ドクトル　オルレアニユ述

これは從來小兒虎列剌と稱せらるゝ小兒の恐るべき急性胃腸加答兒に對する豫防法に就て合理的に而かも通俗簡明懇篤に說いたものであります、稍や時期が遲れたやうでありますけれども一般に小兒の下痢に對する豫防として心得置くべき事と思はれますから玆に大體を邦語に譯して御紹介致します(譯者)。

俗間に下痢と云ひ、又小兒虎列剌と稱せられまする此の疾患は、夏季に最も多く犧牲を出す所の疾患の一つで御坐います。最も頻回この病に罹りまする年齡は一歲、卽ち哺乳兒で御坐います。又最も危險の

多いのは、人工的に榮養せられる小兒、卽ち此や吸乳壜で牛乳を飮まされる小兒であります。吸乳壜で牛乳を與へる方法は、殊に危險が多いので御坐います。吾々の統計で見ますると、此の病氣で年々死亡致しますものは、ブカレストでは、二歲までのものが五百五十六人御座います、それでこれを全體の死亡數七千に比較致しますると、實に著しい數と申さなければなりません。

小兒が斯樣な病氣に罹らぬやうに致しますには、如何に豫防すれば宜しいかと申しますと、これには先づ、此の病氣を惹起す所の原因を知らなければなりません。

ぢき近頃までは、此の病氣を起す所の唯一の原因は病原菌を以て不潔にされた牛乳に在るのであらうと云ふ說で御座いました。扨て牛乳を腐敗せしめる所の原因はと尋ねますると、これには種々の事が御座います。卽ち牛の乳房の汚穢、榨乳者の手の不潔、牛乳を容れる器物の不淨、暑中に牛乳を貯藏することの不完全等であります。倘小兒に與ふる牛乳をよく煮て、全く無菌としないことも其の一で御座います。偶然牛乳の中に這入つた所の黴菌が、十分煮て殺されない時には、矢張牛乳の中で繁殖することが出來るのであります。

實際牛乳が此の疾患の原因の一つであらうと云ふことは、斯う云ふ事實があるので御坐います。卽ち母乳で育てられて居る小兒に比較致しますと、牛乳で榮養される小兒には十倍も下痢で死ぬるものがあるのであります。此の差別は何處から來るかと申しますと、母乳は空氣に觸れない、從て病原物に由て惡くされる氣遣はありません、乳は直接母の胸から小兒の胃の中へ流れ込むのであります、此事よりこれを解明することが出來ます。

所が近頃に至りまして巴里のパステール研究所の敎授メッチュニコッフ氏は、その研究の結果、單に牛乳のみが此の下痢の原因ではないと云ふことを證明致しました。それは夏期の間は、母乳兒も矢張多數

この病氣にて斃れると云ふ事實から解ることであります。これに就てメッチュニコッフ教授は次の如き科學的說明を與へました。卽ち同氏の見解では、この下痢は、一種の小桿狀の物で、善性より惡性に變じ得る所の一種の寄生物に依て惹起されるのであると云ふのでありまして、若い猿やモルモットに就て行つた試驗で見ますると、プローテウス、バチルスと云ふのが此の病氣の眞正の特種の病原物であると云ふことが證明されたのであります。所で幾回となく牛乳の試驗をして見ましても只稀に此のバチルスを發見するに過ぎませんので、この下痢の由來を何時も牛乳に歸する譯には行かぬのであります。

メッチュニコッフ教授は、幾多の試驗に基いて、プローテウスは街衢の塵芥の中に無數に居るものであることを唱へました。そこで彼の蠅が、蓋もせずに市中で賣て居と所の食品に此の病原物を持運ぶことになります。

然るに、メッチュニコッフスは母の乳で養はれて居る小兒は、野菜とか、果實とか、麵麭とか云ふものは食べない、從つて蠅に依て汚された食物を食べる譯はないのであるから、何うしてプローテウスが小兒の消化器の中に侵入するか判明らないと申して居ります。牛乳中に此のプローテウスを發見することは稀なことである、而かも前に申しました通り母乳兒もプローテウに由て起つた下痢の爲に死亡するのであります。それでありますから、プローテウスバチルスが小兒の消化器内へ入込むことの出來る他の途がなければならぬと云ふことになつて參ります。小兒の傳染は、小兒の周圍に居る人々に由て起ると云ふことは疑のないことで御座いまして、此の病原物を以て汚された食物を食る所の母、親戚及び其他の人々はプローテウス保有者となり、そのプローテウスは又無數に糞便と共に排泄されるのであります是に由てその結論として次の如き豫防規則が出來て參ります。

母乳兒には、母は、酒精或は煮沸したる水、從

つて無菌にされたる水を以て乳嘴を洗ひたる後、始て乳房を與ふべし。

母は前以て水と石鹸とを以て其手を洗ふべし。

小兒には、母乳の外決して他の食物を與ふべからず、殊に夏季の間を然りとす。

同じく、小兒には、病原物を以て汚されたる疑ある他の物は決して手に持たしむべからず。

牛乳を以て榮養さるゝ小兒は、唯よく煮沸されたる牛乳にして、冷所に於て、沸湯を以て清洗されたる器物中に能く蓋をなして貯へらるゝ牛乳のみを與ふべし。

一晝夜の中に與へらるべき牛乳は、毎朝十分に煮沸し、上述の方法に依て貯藏せられざるべからず。日中の暑氣は牛乳を變敗し、且つ偶然牛乳中に存することある病原菌の繁殖を促すものなることを忘るべからず。

牛乳を與ふるに使用すべき吸乳器は、小兒の榮養の前後に於て、沸湯中にて洗はざるべからず。小兒の吸吮に用ゆる器の護謨の乳嘴も亦同樣に處置せざるべからず。

此の乳嘴は、各哺乳の後に、清潔なる齒磨小楊子を以て——唯この目的にのみ使用すべきもの——内外共に摩擦せざるべからず。斯くしてこの乳嘴は、熱湯にて洗ひ、同じく湯の中に貯ふべし。

其他母、乳母、近親の人々に勸告すべきことは、小兒の口に接吻せざること、指を小兒の口に入れざること、食片を大人の口より小兒の口に移入れざることにして、——こは凡ての階級に於て認めらるゝ所の惡習なり。

小兒自身、殊にその手は可及的清潔に保ち、總て身に觸るゝ所の物も亦同じく清潔に保つべきものとす。尚ほ麵包、野菜及び斯の如きものは家にあると商店にあるとを問はず、特に市街に於ては、塵埃及び昆蟲を防ぐ爲に、よく蓋を被はんことを勸む。最後に公衆をして相當の關係を知らしむることは衞生局の任なるが、又國民の健康を增進せ

しむるに努め、公開講演に依て幼兒の母及び看護婦等を激勵することは實に諸種の集會及び協會に取つての感謝すべき使命なりとす。

育兒者の心得概略（承前）

宮本仲

今茲に天然養育料(即ち母乳)の人工養料(即ち牛乳等)に勝れる事の例證として此表を御目に懸け候御參考と可被成下候此れは(ルート)と申人の作れる表

嬰兒ノ養料	成長良	同中等	同不良
母乳ノミ	六二、六人	二三、三人	一四、〇人
母乳ト牛乳等ト併用	二六、八人	二六、三人	四五、九人
牛乳等ノミ	一〇、〇人	二六、〇人	六四、〇人

にて小兒發育の良否を比較したるものに候、斯く百人の調査を行ひ候に純粹の天然養料のみと人工養料のみとの小兒に及ぼす關係は其良否の差別甚だ著きしものにて即ち天地の違ひを顯はし居申候其他又た「ミンヘン」府のポッペルと云ふひとは小兒の死亡數に附て母乳即ち天然養料兒の七、六分に對して牛乳等人工養料兒は二四・七分也との比例を算し又た同府のマイエル氏は母乳兒の死亡一五・〇に對する牛乳等兒は八五・〇の比例數を示したること有之候是等皆な人工養料兒は天然養料兒より育ち惡く死し易きこと五倍程多きにも相違し候是に就ても母乳は中々大切なる事分明候ものにて濫に廢棄するは惡弊と認むべく存候夫れ故世の實母たる人は自身の身神上大に攝養を勤めて躬ら疾病に罹らぬ樣に注意すべきは肝要に候是れ吾身の爲めのみならず即ち愛兒の爲めに乳汁を損害せざる樣に心掛けるの一大慈悲と存候然るに乳兒を省みるの念少く反て浮世の義理と稱して無益の交際や物見遊山に心身を窶し候如き虚飾家都下などには往々見る所に御座候是等は實に吾兒に對して眞の愛情を解せぬ迂濶ものと外難評候小生は是等の人に對しては無慈悲の所行とまで酷

評を加へて其心得違を戒め申候世の中の廣き稀には「若き嫁に今から子孫の苦勞を致させては氣の毒だ」などゝ申し咎候姑媼等も有之候是等は嫁の心得違ひを助長せしむるものにて宜しからず候故小生は然らば初めより嫁入させぬが宜しかりしにと笑ひ返し候事も有之候右樣の義は二三の實例には候得共之を大にして日本國中澤山ありとせば是れ我が國勢の損失に歸し可申事と相成候故御地方などにて心得違のもの出で不申候樣貴所樣等折々には人々へ御誨戒置被下度偏に望む所に御坐候都會を眞似し候は地方の人情に候得共惡しき事と思はれ候分は其侵入せざる樣に早く御豫防被下候樣に致し度候此等は貴婦を初め其地位に在らせられ候方々の御務めならんと推し乍恐相願候次第にて御座候些か申上候事横道に入り候段恐入候筆の走り違ひと御宥し被下度候。

併し實母たる人にして其乳汁の性質不良なりとか又は不慮の病にても有之候とかの不仕合に遭遇せる時は決して吝む所無く斷然之を廢止被成候事と希望致し候尤も其場合には醫家の鑑識と指揮とを御依賴ある方可然候不良と定まりたる乳を最一日々々と與へて廢止を吝まれ遂に俄然大患を兒體に發し初めて狼狽苦慮せられ候樣の不幸は往々實見する所に候て遺憾の次第に候但し醫家の側よりも輕卒に廢止を奬むべからざるは勿論なれども十分に試驗して申したる事は母たる人に於て速かに採用被成ねば惡しそれ故採否共に尤も鄭重なる考慮の上に決行するものと致し置度候。

サテ實母の乳汁を廢止する時は何を以て第一の補償品とするやとの御質問には先づ乳母也と御答申度候併し乳母も亦た「其乳汁は吾が兒の爲めに分泌するもの」であるから然樣右から左へと隨意に求め得らるゝものに無之假令乳母たらんと志望する人にても其乳汁試驗體質診査を經て善良なりと認めたる上ならでは傭入るべきものに無之候併し玆には乳母の檢査等は相略し不申上候乳母の診査は能く御地の醫手へ御必要あらば御依賴被下度候且又乳婆御傭入の際

には乳母攝養等の上に就て申上度事も可有之と豫想候間更に其旨御尋ね被下度候。

醫家の認定に於て實母の乳性善良にして唯だ分量不足のみといふ如く全廢に及ばずと諭され候時は素より天然人工の半を往くべきが宜しと存候前に表の示す所に於ても全くの人工養料よりは其成績殆んど倍數の良を呈し申候但し年々歳々人工養育法に就ては諸先輩が研究せられて隨つて發明の點も多く相成候故以前よりは多少良成績の方に進步したるは事實と被存申候併し小生が維納府に修業中の頃恩師「モンチー」先生が日本にては人工養育法の未だ開らけぬは不幸の如くなれ共其代りに天然養育料が自在に得られ、且つ一般に必要として重んじ居れる事であらう是れ無上の幸福として怨羨に堪へぬ歐洲にては人工養法が開らけた代り天然養料を輕視する傾向に立ち至つた是れは育兒上非常の大不幸として余は嘆息し居ると語られた事が有之申候其際には小生倘ほ無經驗の未熟生之を然程の金言とも思ひ不申候得しが愈々實際に當り見申候今日と相成候得者益々此言の貴き價なりしを思ひ當り申候何卒我邦にても追々人工養料の自在自由に行はれ易きに惑はされて天然養料の貴重なるを相輕んじ相忘れ候結果と迄陷らぬ樣今より心掛け申度存候是は我々醫家の注意すべき要點に候得共貴所樣方も此點に御注意被下我々の希望をも御援助被下度是亦所冀に御座候。

牛乳等愈々人工養料を採用すべき場合と相成候へば又た其牛乳の良否を能々御撰擇被成度候人工養料の主なるものは目今牛乳を普通と致し候乍去山羊乳も驢馬乳等も相用候ふて無差支候之を概言すれば求め得易く、價安く、味宜く、且つ變じ易からざるもの、尤も便利にして普及し能ふべき養料と存候故に我が國にては特に牛乳を第一の要品と認め之を此處の標準として大概の用法等可申上候牛乳の調句法等之を小兒の成長度に應じて尤も適當に且つ綿密に論ぜんには其各兒に就て醫家の說を聞くに非ざれば全く難き事に屬し申候何となれば誕生年月同樣なる

小兒に在ても滿一ケ年間位の內に在つては其生長に大小と強弱との差異が著しく有之候ものなればなり然れば玆には尋常中等度の發育兒を標準として牛乳の調勻法を大約可申述候卽ち初生の一二日は先づ牛乳一と水四の割に初め三四日には牛乳一と水三分の割とし二週乃至三週には乳一分と水二分と爲し一ケ月內外乃至三ケ月には二分と三分（卽ち乳一分水一分半）の、割合とし四ケ月に至れば最早牛乳一分水一分卽ち等分と爲し六ケ月には二分と一分とし八ケ月には三分と一分の稠度に進め九ケ月乃至十ケ月以後は純乳と改め全く調勻の用無之と致候但し小兒の胃腸が其強弱如何であるか且つ其發育の狀他の健康兒に較べて如何であるかといふを不斷保育者は注意して乳汁調勻度を斟酌するが必要なり幸に發育宜く腸胃も強壯にて、大便の消化も善く、通利も宜く、色も普通、惡臭も無き、などゝいふ場合には早く濃稠の度に進め行くも妨げ無之候之に反して大便不消化を呈し、胃腸弱き症徵ある傾向を認むる時は其調勻度を進むる事尤も徐々なるが安全に候之を概表に示せば大約左の如くに候御參照の上前申上候通漸次を追ふて日に月にと徐ろに少々づゝ御進め相成候はゞ一層宜く候總て小兒には習慣を破りて一頓に事を變更せしめんとするのが惡しと思はれ申候且又其調勻度も諸家の法一定仕らず或人は六七ケ月にして既に純乳を與へ候て宜しといふも有之候なれど小生等の實見にては矢張小兒の强弱如何に關して論定すべき事にて普通に在ては餘り濃稠の早きに失せんよりは寧ろ大切に漸進する方安全ならんと認め居申候

牛乳調勻概表

發育月數	牛乳	水
初生乃至一週間	一分	四分乃至三分
貳週乃至四週	一分	二分
一ケ月內外乃至三ケ月	二分（一）	三分（一半）
四ケ月	一分	一分
六ケ月	二分	一分
八ケ月	三分	一分
九ケ月乃至十ケ月後	純乳	○

此はほんの概算のみに候故小兒の狀況に依りては此表に於けるより大に遲速も有之候例之ば虛弱の小兒には八ヶ月に在て尙ほ等分の乳を與ふる事あるが如し又た詳細に申せば四ヶ月と六ヶ月との間には一半分の牛乳と一分の水といふ割合を設くるが如き例も有之復た八ヶ月の後に四分の乳と一分の水を割合ふて試むる事も可有之候の類是皆な御實見に御任せ申度候。

偖て其分量は人工養料にては定め易く候も天然卽ち母乳の方に在つては確然一定算を得難く候故に大約其時間にて定め候卽ち初生後二ヶ月位は最少量づゝを攝取候のみ故與へ候時間も二時間乃至三時間の隔りにて與へ候而して三ヶ月以後位に發育したる時は一時の攝取量も增多候故與ふる時の間隔も全然三時間以上と定め候方可然候而して其哺啜時間は乳汁分泌量の大小に應じて十分內外より十五分位と致し候而して普通は小兒が哺乳十分位の後放しては飮み飮みては放し候事可有之其事三回以上に相成るときは既に滿腹して慰み飮みに移れる證徵なりと認めて試みに乳房を去りて見るべきものと致し置候慰み飮みの慣習は惡しきものに候間御止め被成度候且又夜間特に深夜の哺乳は可成慣習せしめぬ方可然候古來乳は養ひに相成候樣申傳へ候得共それは全く誤りにて候深更の乳のみ多く飮み候小兒は兎角筋肉少く脂肪肥大のみに陷りて弱きものに御座候それ故添寢添ひ乳は禁ずべきものに候別して眠りながら授乳候は危險の事有之恐れべく候。

人工養料の分量は容易に定め得られ可申特に之を嚴重に測定するは必要の事に候人工養料に於て此時間と分量を濫妄に致し候ては如何に良質の牛乳を選み調乳法を面倒にするも皆な徒勞に歸し候結果と可相成候如何となれば母乳は早く消化し易く從つて胃を去る事速かなれ共牛乳はそれよりも消化困難なる故胃に勞苦を繼續し易き事實あればなり然れば人工哺育の時間は先三時間若くは三時間以上とす（一ヶ年の終位に至れば四時間位として一度の分量增加す）

尤も初生時頃最少量づゝ攝取の頃は二時間以上位にて與ふる事もあるべし即ち初生一週間位は一回一〇・〇乃至三〇・〇「グラム」以上位にて其第一二日には二三回のみ位なれ共一週の終には既に六乃至八回の攝取と相成候故に一日の全量は一合餘即ち二百五十瓦以上にも昇り申候而して第二週には三五・〇乃至五十瓦許三週乃至一ヶ月の終には五十乃至七十五瓦位尤も強壯兒は百瓦許を欲し候ものも往々有之候二ヶ月以後は七勺內外滿三ヶ月以後は八勺半年以後は一合迄與へ候て宜しく候三ヶ月若くは半年以後と申し候ても量は矢張百六十七十乃至二百瓦迄と致し置く方可然候其量に變り無くも稠度が增し候故實

小兒發育日數	一週以內	二週乃至四週	五週乃至八週	三ヶ月乃至四ヶ月	六ヶ月	八ヶ月	九ヶ月以後
哺乳一日ノ回數	八回	八回	七回	七回	六回	六回	六回些少副食
哺乳一回ノ量	三〇・〇乃至五〇・〇	五〇・〇乃至七五・〇	一〇〇・〇乃至一三〇・〇	一二〇・〇乃至一五〇・〇	一七〇・〇	一八〇・〇乃至二〇〇・〇	一八〇・〇乃至二〇〇・〇
同一日ノ全量	二五〇・〇乃至四〇〇・〇	四〇〇・〇以上六〇〇・〇	七〇〇・〇乃至八〇〇・〇	一・〇〇〇・〇	一・〇〇〇・〇	一・〇〇〇・〇	一・〇〇〇・〇

際は牛乳を漸々多く攝取候事に相當り申候之を概算表と致し申候得ば即ち大凡右の如くに相成申候而して乳に和混する水は必ず煮冷しを御用ひ可被成候且又哺乳罎洗滌等に用ふる水も亦た決して生水は用ふべきものに無之候其調匀したる牛乳には往々糖を加へて甘味を附し申候之には乳糖蔗糖孰れにても宜しけれ共乳糖を以て勝れりとす蔗糖は通常角砂糖を用ふ即ち一合中に角糖の半乃至一箇にて十分に候可成少く若くは加へぬも妨げなし（近年は滋養糖なるもの輸入せらる此主なる性質は飴の類なれば隨分甘味にて滋養の效を兼ね利益なるものなり）

調匀に用ふるは普通白湯なれ共稍々成長せる小兒には湯のみに限り申さず米麥等の粥汁若くは葛湯等の類を伍することもあり肉羮汁を混加する事も有り又或る治療の目的を以て澱粉粘液汁を伍加することも有之候（近年「マルツエキス」と申すもの輸入せられ滋養と治療との目的に配伍せらるゝ事あり此れは便祕の癖ある小兒の牛乳に混加して效多し）八九ヶ月

後の小兒に湯を用ひず肉羹汁を伍するなど隨分宜しく且又離乳の準備として粉質食に慣れしめんが爲めに稀薄の糜汁を用ふるなど必要も有之候故此の適否は尙ほ醫家に御相談有之度と所祈に候時間は右の如く標準を定め候も安眠し居るものを時間が來れりと喚起すにも及ばず又た能く遊びて求めざるに强て與ふるに及ばず候尋常 善良 の發育を營む小兒は生後五六週日の間は空腹を訴ふる時のみ醒覺し其他は飲むに從ふて直に眠るを常とし大凡二乃至三時間經たざれば目覺めぬものなり西洋の俗諺に「能く眠る兒は能く育つ」と申す言之れある位の次第にて候故に其眠りにて自然授乳時間に正しき習慣を附け得可申候反之呱々頑泣乳を貪りて止まぬ樣子ある時は十分二十分早く與ふとも大なる害は無之唯だ此際には平時の習慣に相違し若し疾病の狀にても無之や否やといふ點に多少注意を存したらば尙ほ行き屆いて結構に候深夜即夜十時後頃より曉六時頃迄の間には可成禁すべきは前に申したる如くなれ共未だ成育少き嬰兒には全く與へぬ義は實際六ヶ敷なものれば不得止事として一回位は默許に附し置くも可然候萬一授乳しても後から後と貪るが如くに頑泣して更に安眠の狀無之ものは多分は疾病に基くものなり其節は能く便の性質又た便通の度等に注意し異りたる點あらば早く治療を受けらるべし又た體溫をも計り視らるべく候無病の小兒は決して然樣に泣くものにては無之候。

（未完）

家庭衛生

味噌に就て

名義

ミソと申しますのは、何う云ふ意味から附いた名であるか詳でありません、古い書物に美蘇、味曾などと書いたのがあります。或說では、末醬と云ふの

が本で、それを書誤つて末醬となり、末に口篇を加へて味とし、醬は曾と書いてアテ字になり、何時しか味噌と書くやうになつたらしいと云ふことであります。而して末醬の末は搗末の義で、その末せざるものは通常のヒシホ、末したものが卽ちミソであると申すことであります。又唐の人で我邦に來て律宗を廣め、藥物の事なども敎へた高德の學僧で鑒眞大和上と云ふのが御座いました、盲目の人で御座いましたが、此人にミソを獻じた所が、食べて大變おいしいので未曾有と譽められた、それから、味噌と云ふたのであるなどゝ云ふ説を聽いたことがありますけれどもこれは、取るにたらぬ説と思はれます、要するに味噌と云ふ字の意味はよく解からぬのであります。

造法

昔の味噌の造り方も今日と大差は無かつたやうであります、延喜式卷第三十三に、大膳下造雜物法、末醬料醬大豆一石米五斗四合料小麥五升四合酒八升鹽四斗得一石と見えて居ります。今日の東京で申します所謂田舍味噌は、非常に種類も多う御座いますが何れも大豆を煮て、それに麥糀と食鹽と水とを加へて搗き碎き、桶に入れて醱酵せしめ、一二年間貯へて食用とするのであります。

江戶味噌、仙臺味噌等は米糀を用ひて製するのであります、卽ち煮たる大豆を搗き碎き、之を大きな團子に丸めて乾かします、それから此の味噌球を切り碎きて、糀と食鹽とを混じ、水を加へて桶に詰め、二個月位の後に再び搗き返します、四五回も斯樣に致しまして、二年程置きまするど赤褐色の上等の仙臺味噌が出來るのであります。江戶味噌は仙臺味噌よりも糀は少なく食鹽を多く加へ、田舍味噌の如くにして製します、これは二三ケ月で熟しますが、既に一月でも食べられぬことはありません、味は甘い方であります。又東京よりも上方地方で多く用ゐらるゝ白味噌は矢張り白米糀を加へるのでありますが食鹽の量が僅かでありますから、普通の味

噌よりは甘う御座います、且つ熟し方は江戸味噌よりも早く、一週間位で食用に供することが出來ます。

種類

今日東京に於て普通用ひられますのは、江戸味噌、仙臺味噌、三州味噌、田舎味噌、色に依て赤味噌、白味噌、鹽加減に依て甘味噌、辛味噌などの種類があります。昔は麁味噌、垂味醬など丶云ふ名があり、又その所に依て志賀末醬、飛驒末醬、飛鳥末醬など丶云ふのが名高かつたと見えます。古今著聞集と云ふ書物に次のやうな面白い狂歌が御座います。

式部大輔敦光朝臣のもとへ、奈良なりける僧のあすかみそといふ物をもてきたりけるに、いつのぼりたるぞといひければ、僧かくなん

きのふいでゝけふもてまいるあすかみそ
みかのはらをやすぎてきつらん　敦光朝臣

成分

味噌は前に申しました如く幾多の種類があり、同じく田舎味噌と申しましても原料の加減が非常に異いますから、これが味噌の成分であると一概に示す譯には參りません、一々分析の成績が違ふのでありますけれども、左に其の一例を擧げて見ますると

	水	蛋白	無窒素物	脂肪	木纖維	灰
白味噌	五五・九七	一二・三三	一四・〇三	四・九三	三・八六	一〇・二四
鹹味噌	五八・五四	一五・四三	一二・三六	九・九四	四・七三	一四・〇三
淡味噌	五一・五〇	一〇・一一	一六・六六	六・〇四	四・五〇	一八・二〇

斯様な成分になつて居りますから、先づ上等の榮養品と申して宜しい。只不消化の成分が隨分多い。又含窒素物に富むで居りますが、右の蛋白と云ふのも粗蛋白であつて、其中眞に身體の榮養となる蛋白は半分位しか含むで居りません。其他は殆ど效のない所のアマイド化合物と云ふやうな物になつて居るのであります。乃ち味噌の中に含まれて居る含窒素物の分析を見ますると左の如き物になつて居ります。

	三河味噌	仙臺味噌	田舍味噌
水分	四六・八七三%	五〇・九二三%	五一・四一〇%
總窒素	一・九三二	一・八三五	一・六四五
蛋白質窒素	一・〇七〇	〇・九三六	〇・九一二
可溶蛋白質窒素	〇・九一六	—	〇・八九二
有機鹽基窒素	〇・六二七	〇・五一三	〇・五二三
アンモニア窒素	〇・〇二四	—	〇・〇二二
アミノ酸窒素	〇・二九八	—	〇・一八九

效用

それで味噌は比較的不消化成分又は不用の成分が多く、食鹽が非常に多量でありますから、消化器の弱い人は味噌汁に堪へません、好で味噌汁を食べる人は大抵消化器の強い人であります。同じ理由で以て冬は味噌汁も結構であるが、夏は餘り好まれません又病人の榮養物として勸むることも出來ません、西洋人の所謂ソップよりも味噌汁の方が宜いなど〻威張る國粹家も御座いますが、成分が全く異つて居りますから、ソップを與ふべき病人に向つては、幾ら日本人でも味噌汁を以て代用する譯には參りません併し吾々の常食中に於ては比較的價値のある榮養品と申して宜からうと思ひます、總て植物性の食物を取る時には食鹽も自ら澤山食べる必要があるのであります。

要するに味噌の如き物は、消化器の弱い人よりも強い人に適して居る食品である、暑い時よりも寒い時に宜しい、坐業或は精神的の仕事をする人よりも勞働或は筋骨の仕事に從事する人に適當した食品である、從つて都會の人よりも田舍の人の珍重する食品であります。著者も殆ど坐業を執て居る胃弱の都會人に屬して居るから、餘り味噌汁黨ではない、夏期などは迚も堪へぬ方であるが、嘗て軍隊生活をした頃に稍秋寒くなつて機動演習などに出掛けた時分に拂曉宿營地を出發することが多い、斯樣な場合には種々の御馳走があつても一椀の味噌汁に如くものは無かつた、と云ふものは、第一に身體が溫くなる、他の物よりも容易に滿腹する而して比較的長く空腹にならず、餘り他の物を欲しくない、これを以て觀て

も、寒に堪へて盛に運動する健康人の最も單純なる獻立には、味噌汁の極めて適當なるものであることが解かります。況んやこれに澱粉の多い薯類などを汁の實として入れて煮るのでありますから、胃腸の強健な人には、立派な榮養物となるのであります。更に魚肉又は獸肉等の脂肪や蛋白に富むだ物を混すれば益々價値ある料理となることは勿論で、これは又後に至て少しく申述べる積りであります。

尙ほ俗間で、食用以外に味噌を應用することがあるさうで御座います。昔は城を築くに、城内の一部の疊を芋幹で造り、壁を味噌で塗つたと云ふことを聞いて居りますが、これは籠城して食盡きた時の用意として誠に面白い考であります。怪我就中火傷をした時に生味噌を塗ると宜いと申すことであります、なるほど此は冷たいから充血を防ぎ、暫時疼痛を緩にするでありませう、又軟泥狀のものでありますから、膏藥の如く外來の刺戟を防ぎ、又多量の食鹽其他多少殺菌作用のあるものを含むで居りますから、頗る救急療法として當を得てるやうにも思はれますが、外科的處置として味噌は決して清潔の物と云ふことが出來ない、且つ其當座こそ冷たいので暫時快感を覺えますが、少しく時間を經ちますと、反つて甚しく刺戟して不良の結果を來しますから、折角の手療治も徒らに味噌をつけることになりますから斯の如き應用は今日に於ては誤つたものと云はなければなりません。

次に喫煙家は、味噌汁を食べなければ咽喉の煙脂が除れないなどゝ申して、是非味噌汁を食べなければ特に煙草の害を蒙むるやうに云ふ人があります。虛言と思ふならば煙管を味噌汁で通して御覽なさい、非常に善く掃除が出來るなどゝ理化學の實驗まで申添へて勸告致します、併し煙管の中空は味噌汁でなくとも只の湯でも善く通ります、又西洋の喫煙家は味噌汁を食べませんが、咽喉が煙脂で詰つて死んだと云ふ話も聞きませんけれども、煙草に醉ふた時、即ち輕度のニコチン中毒の際味噌汁を飲めば大に心

持が善いと云ふのは事實のやうであります、但し其理由は分からない、恐らく只の鹽水でも宜敷いのかも知れませんが、兎に角これは應用しても差支は御座いますまい。右のニコチン中毒とは反對に、アルコール中毒の時殊に宿醉と云ふ狀態の時には、迚も味噌汁は食べられません、非常に不快なものであります。酒客は何れも經驗して居ることでありますがこれは畢竟酒の爲に胃粘膜が害せられ、アルコール中毒の餘焔として嘔氣がありますから、味噌汁の如き味の濃厚にして而かも一種の臭があり、且つ温いものに堪へないのでありませう。煙草に良く酒に惡いのは妙なことであります。

思ひ出すまゝに味噌臭いことの限りを申しますが、右に述べました如く味噌はかなり立派な營養品でありますが、外貌は餘り美事な物では御座いません、西洋人は一種の腐敗物か何かのやうに思ふのであります。此に就て滑稽な話があります。私の知つて居る人で、知名の人でありますが、頗る國粹家で、或時要事があつて亞米利加へ行かなければならぬことになつた、所で先生いくら西洋へ往くにしても味噌汁を食べぬ譯には行かぬと云ふので、味噌を一樽、これに擂鉢擂木の要具迄用意して洋行の途に上りましたが、サンフランシスコが何處かに著いた時に、斯樣な腐敗物を市中に持込まれては困ると云ふて抑留されかけたが、頻りに辨解說明して漸くのことで通過したのは宜しかつたが、之を馬車につけて運搬する途中、又々異樣の腐敗物を擔ぎ廻ると云ふ廉を以て、陳辨その甲斐なく遂に官憲の手に依て棄てしめられたと云ふ事で御座います。實際知らぬ者の眼には頗る外貌の宜しくないものであります。味噌の惡口ではないが、之を料理するに用うる所の擂鉢擂木と云ふものは又實に神々しいもので、これは神代の頃からそのまゝの道具で少しも進步も發達も改良もされずに連綿として二十世紀の今日に至るまで用ひられ來つた寶器と見えます。從つて所謂味噌擂りと云ふ一種特有の運動があつて、これは外國人には

一寸眞似の出來ぬ運動であります。併し日本婦人には祖先傳來の實用的運動法でありまして、瑞典式體操など云ふものよりも遙に善い運動であると思ひます。戯談ではなく、實際味噌を磨りますには、全身を泰然と落著け、腰から肩に至るまで確然たる姿勢にて、之を運用する際には脚にも腹にも手にも緩みなく力が入るのであります、而して初めて磨ります時にはなか〳〵思ふやうに腕が廻りません、且つ忽ち腕が疲勞すると、併し段々練習致しますと、五六人分の味噌汁料は平氣で擂上げることが出來るやうになる、尚ほ練習に依て左右の手を上下に交換して同じやうに巧みに用うることが出來るやうになるのであります、これは眞に善い運動でありますから、私は女中さんのみならず良家の令孃方にも味噌磨をお勧め致すのであります。

料理

ひしほいり　娶入記と云ふ古い本には次の如く記してあります。

山のいもを皮すきて、一寸ばかりに切りて、きじをつくりて、垂味噌にてしたゝめて、上におまのりをおくなり。

垂味噌と申しますのは、本朝食鑑と云ふ書物で見ますと、斯う書いて御座います。

垂味噌或は水垂と名づく、味噌を用ひ、水に研り布袋に盛り桶の上に置けば、則ち水垂下りて桶中に溜る、此を垂味噌と謂ふ、物を煮るの汁と爲すもの也。

此は又かうの水とも稱し、今日の醤油とは少し異ふのでありませう。貞丈雑記に左の如く記して御座います。

醤油は古なし、京都將軍家の庖丁人大草流家の書の趣、醤油を用る事みへず、皆たれみそを用るなり。

ほうろみそ　又ほろみそと云ふ。これは南都法論の際に用ひたので法論味噌と稱したのであると申しますが、恐らく例のこぢつけみそで御座いませう。或

は南部元興寺小塔院の僧正護命が始めて製して、講問の時に衆僧半齋の添菜としたので法論味噌又は護命味噌とも稱する由であります。併しホロ〳〵する味噌であるからほろみそと云ふのであると云ふ說が穩當のやうに思はれます。それは製法を見れば解ります。即ち貞丈雜記には左の如く記して御座います

ほろみそは、やきみそを日にほして、偖こまかにきざみて、胡麻、あさのみ、くるみ、山椒などをきりませて、ほろ〳〵したるみそ也。

大和本草には次の如き製法になつて居ります。

ホロ味噌、其法、新キヨキミソヲ、爼ノ上ニヒロゲ、庖刀ニテコマカニタヽキ、大豆ヲ切クダキ、庖刀ヲフセテヲシツケ、細ニシ、ウスキ平ナベニゴマノ油ヲ少ヌリテ、右ノミソヲ入、ミソカハクホド炒、其間ニカチノ大匕ヲ以クダキトリアゲ、フルヒニテフルフ、フルヒヨリモラザルハ、又炒リテフルフ、其後イリゴマ、ケシ、山椒、杏仁、カヤノミクルミナド好ニ隨テ加フ、久シクコタヘテ味不變。

昔の職人盡歌合などに斯んな歌が出て居ります。

夏まではさしいてさりしほうろみそ
　　それさへ月のあきをしるかな。
うとくのみならのみやこのほうろみそ
　　ほろ〳〵とこそねはなかれけれ。

此他普通の味噌に種々の材料を混じて、附け味噌、混ぜ味噌又嘗物を作りまして、幾種類あるか殆ど數へ切れぬ程御座いますが、茲に二三の名稱と一二の料理法を擧げて見ませうならば、

酢味噌、胡麻味噌、柚味噌、經山寺味噌、てつか味噌、鯛味噌、うに味噌――等

倘ほ胡椒、唐辛、芥子、山椒等の辛味をすり混せ、或は路の薹の如き苦味のものを硏り、又は胡桃、落花生の如き甘く油こき物を炒つて硏り混せて嘗物とし、葱、芹、三ツ葉の如き香のある靑物をざつと湯に通して水を切て刻み、酒と砂糖或は味淋などにて味噌を延して合物に致します。

附け味噌としては豆腐の田樂は名高いものでありまして餘程古くからあつたものと見えます。話は豆腐が主になつて參りますが、田樂と云ふ名は、彼の鎌倉、室町時代あたりに盛であつた舞の田樂から來たものなそうであります。それで北條高時を評した川柳に、

田樂がすきで入道味噌をつけ

などゝ云ふのがあります。此の田樂に就ては隨分面白い話も御座いますけれども、味噌よりも豆腐の方に關係致しますから、今日は略しまして、田樂味噌の造り方だけを一寸申上げて置きます。

田樂味噌　赤味噌に砂糖を入れてすり、味淋にて延べ、裏漉にかけるのであります、而して拵へて置いた豆腐に附けてさつと燒き、山椒の葉を添へる、或は先に山椒の葉を味噌に研り混ぜても宜しい。

木芽田樂味噌　菠薐草、五加木の芽、通草の芽、或は其他の青菜の類を湯煮し、搾りて刻み、味噌にすりませ、木芽のある時は之を用ひ、無き時節には山椒の實を煎り、その皮をすりませて裏漉にして用ゆる。

魚田味噌　普通の田樂味噌に鷄卵の黄味をすみ込む

柚味噌　單に柚の皮と砂糖を味噌にすり混ぜたものも柚味噌と申しますが、柚味噌と云はんよりは味噌柚と云ふた方が適當な料理法があります、それは、中等大の柚の蔕の所を圓く皮を切り拔き、中實を剔り出し、別に汁と皮とを味噌に混せ、少しく砂糖を加へて、よくすつて裏漉にしたものを前の柚の容の中に詰めて、切拔いた蔕の所を再び蓋にして蒸のであります。

其他茄子の鴫燒、蠣味噌、鳩のはろ味噌、時雨味噌——などゝ数限りもなく味噌料理が御座いますが、さのみはとて略すことに致します。

尚は味噌汁に至ては、植物性の材料の外に獸肉でも魚肉でも萬種のものを汁の實に致しますから、茲に列擧する限りでは御座いませんが、中にも鯉の濃漿、薩摩汁などゝ云ふのは、何方も御存じの名代の味噌

汁で健康な胃に取つては頗る榮養價の多い、味の濃い味噌汁で御座いますが、くだ／＼しくなりますから此も拵へ方は略しまして、只一般に味噌汁を造る上に就て注意すべき原則とも云ふべき事を申上げて置きます。

一、味噌は必ず食用に先立つて研るべき事。
（前夜よりすり置けば味を損ずること著るし）

一、味噌汁は強き火にて煮るべき事。
（緩き火にて長く煮る時は、滓多く味惡し）

一、味噌は可及的丁寧に長く研るべき事。
（但し三河味噌は味噌漉にて洗ふやうに靜に溶かすべく、決して摺り用うべからず）

貯藏の注意

味噌を貯藏するには、瓶或は硝子壺が最も良いのであります。即ち瓶或は硝子壺を熱き湯にて清潔に洗ひ、全く乾燥したものを、清潔なる乾いた布巾にてよく内部を拭ひ、之に詰めて完全なる蓋をなし、更に油紙を以て被ふ、若し日々蓋を開けるものであれば、油紙を丁度瓶の口だけの圓さに切つたものを味噌の上に被ひ、其上に蓋をなし置くも宜敷しい、要するに味噌は最も濕氣を忌むのであります、少しく濕氣に濁るれば容易に黴を生じ、從て腐敗し易くなります、それ故に梅雨期などには十分用心することが肝要であります。尚ほ一つ注意すべき事は、味噌を出す時には、必ず上層より順次に平に取り出し、決して眞中に杓子を突立てゝ堀らぬことであります。而して取つた後は必ず平に撫でゝ置くやうにする、斯うすればなか／＼變敗致しません。味噌は大抵毎日用うるのでありますから、秋冬にかけては樽買にすれば割合に安くなりますけれども、春夏又小人數の家にては兎角黴を生やすやうになりますから矢張小買の方が宜しからうと思ひます。

鑑別法

昔より、味噌の味噌くさきは下品なりとか、上味噌にあらずなどゝ申して一種の諺の如くになつて居りますが、善い生味噌は矢張、うまい臭が致します、

味噌汁などに致しましては、實際味噌臭きは上等の味噌では御座りません。腐敗しかゝつて居る味噌は第一に黴臭いから解かります、更に惡くなれば酒臭く、一層惡くなれば酢臭くなりまして味も酸味を帶びて食べられなくなりますから、味噌は外観よりも臭でよく良、不良を嗅別ることが出來るものであります。



雜報

○御賑恤金下賜

天皇陛下には去月十三日御大喪當日全國の窮民御賑恤の思召を以て、御内帑金一百萬圓を下し賜り、同時に左の　勅語を賜ひたるにつき、宮内大臣は内閣總理大臣に移してこれを執行せり、御仁德何にか比し奉らむ畏しとも畏し。

勅語

朕大喪に丁り特に命じて内帑の金を出し各地方に頒賜して以て慈惠救濟の資に充てしむ

右の　御沙汰を拜し、西園寺總理大臣は同日内閣告示第五號を以て左の如く配布額を告示したり

朝鮮	二十萬圓	臺灣	四萬八千六百圓
關東州	七千圓	樺太	一千圓
北海道	二萬二千八百圓	東京	四萬三千三百圓
京都	一萬六千八百圓	大阪	三萬一千圓
神奈川	一萬七千圓	兵庫	二萬八千七百圓
長崎	一萬六千圓	新潟	二萬六千圓
埼玉	一萬八千二百圓	群馬	一萬三千七百圓
千葉	一萬九千四百圓	茨城	一萬八千二百圓
栃木	一萬四千圓	奈良	八千百圓
三重	一萬五千二百圓	愛知	二萬七千二百圓
靜岡	一萬九千九百圓	山梨	八千三百圓
滋賀	九千三百圓	岐阜	一萬四千五百圓
長野	二萬百圓	宮城	一萬千二百圓
福島	一萬七千七百圓	岩手	一萬千三百圓
青森	一萬六百圓	山形	一萬三千二百圓
秋田	一萬三千百圓	福井	八千八百圓
石川	一萬千圓	富山	一萬八百圓
鳥取	六千二百圓	島根	一萬五百圓

岡山	一萬七千三百圓	廣島	二萬三千圓
山口	一萬四千九百圓	和歌山	一萬四百圓
德島	一萬三百圓	香川	一萬四百圓
愛媛	一萬五千百圓	高知	九千六百圓
福岡	二萬五千圓	大分	一萬二千六百圓
佐賀	九千六百圓	熊本	一萬七千八百圓
宮崎	八千圓	鹿兒島	一萬八千九百圓
沖繩	七千四百圓		

○皇太后桃山行啓

皇太后陛下には桃山御陵御參拜の爲め去十三日午前十時宮城御出門午前十時二十五分新橋御發車にて行啓あらせらる

○拜觀期延長

青山葬場殿の拜觀期及び伏見桃山御陵參拜期は本月十五日迄なるが、毎日數千の拜觀參拜者あるより五日大喪使評議所會に於て期限を延長する事に決し葬場殿は十一月六日明治天皇百日祭迄御陵は十一月三日即ち明治天皇御誕辰記念日迄(但し十月十五日臨時祭典舉行當日は一般臣民の參拜は中止)

○虎列刺と渡米者

今回日本内地虎列刺病流行の結果、其流行地より渡米せんとする者に對し米國政府は長崎、神戸、横濱等の乘船地に十日間滯留せしめ其健康體なることを確認したる上ならでは健康診斷書を附與せしめざる事となれるが、斯ては渡米者の不便尠からざるを以て、郵船、商船及び東洋汽船の三社より種々交渉したる結果、滯留期間を五日に短縮し、渡米者を旅館に投宿せしめて檢疫醫毎日健康を診斷する事となれり

廣告

○本會例會

私立大日本婦人衛生會は本月五日午後一時より神田區一ツ橋通り女子職業學校に於て十月例會を開けり、當日は醫學博士今裕氏を講師として日常生活上に必要なる衛生談を聽講する旨豫て會員に通知したるも、其後端なく虎列刺病東京に入り、漸次蔓延の傾向あるより、臨時に役員協議の上、更に宮本博士及び栗本博士を聘して虎列刺病豫防の注意を聽く

ことゝなり、兩博士も快諾せられて此會を開けり、然るに急遽の事とて會員に通知狀を差出す暇なく、一面に於ては可成多數の婦人に聽講せしめたき考より、前日又は當日朝刊の諸新聞紙上に廣告を依賴したりしなり、會員諸姉これを諒させられんことを。當日例會の概況を報せんに、午後一時半に至るや出席會員及び新聞雜誌記者其他の聽衆約五百名三階の大講堂に參集、役員列席の上直ちに開會、先づ醫學博士栗本東明氏は虎列剌病に就て、就中其豫防法を主として懇篤に說明せられ、次で今博士登壇、婦人の俗說愚論に惑はされ、非醫師の瞞著する所となるなからんことを戒め、尙は病家と醫師との關係に就て、治療の圓滿に行はるべき道を說かれたり。第三席には東京市駒込病院長醫學博士宮本叔先生は本邦に於ける虎列剌病流行の歷史より、現に目下流行の該病の狀況、次でこれに對する各人豫防上の心得に就き巨細の注意を與へられ、十分に本例會の目的を遂し午後四時閉會せり。宮本博士講演の筆記は、氏の校閲を經て本誌講演欄に掲げたり。因に當日出席の役員氏名は左の如くなりき。

鳩山春子	守屋千代子	松下正子
田村きよ子	阿部鶴子	宮本樂子
緒方悅子	山本多穗子	岩下ゆか子
鶴原誠子	山口貞子	小川孝子
石川貞子	羽田三緒子	岡田德子
高木鈴子	岡山こし子	濱尾作子
三浦敎子	三宅藤子	（以上出席順）

○本會入會者

○岩下ゆか子紹介

●麴町區下六番町三十　特別會員　吉田梅子

●麴町區中六番町二十三　特別會員　山田久子

○小川孝子紹介

●日本橋區箱崎町四ノ一リノ十八　通常會員　中村梅子

●神奈川縣鶴見町岡　通常會員　奧村淺子

○事務所申込

●岡山市下田町十九　通常會員　上野桂子

●名古屋市淑德高等女學校內　田寺愛子

○鳩山春子紹介

●牛込區南榎町八十　特別會員　沖野ふで子

●北海道札幌南三條西八丁目　通常會員　井口よね子

○轉居

●長野市今町白枝通へ　柏原ちか子

●麴町區下二番町三十三へ　加藤春路子

●府下大森山王二七二四へ　西升子

前髪心の覇王 美人印ヘーヤロール

弊店製造の特許ヘーヤロールは原料を遠く濠洲に仰ぎ新歸朝者美容術界の明星たる岡崎エン子女史が母國への土産として持ち來りしものに大改良を加へ衞生と經濟とを兼備したる逸品なる事貴婦人界既に定評あり

ヘーヤロール前髪心壹個の目方

壹尺	中	貳匁四分
壹尺貳寸	大	三匁四分
壹尺五寸	極大	五匁五分



私立大日本婦人衛生會役員氏名

會長　侯爵夫人　鍋島榮子
副會長　男爵夫人　濱尾作子

（いろは順）

幹事　鳩山春子
同　岡田德子
同　山本多穂子
同　松平芳子
評議員　石川貞子
同　濱田捨子
同　服部繁子
同　西升子
同　緒方悅子
同　小川孝子
同　片山龜子
同　丹波貞子
同　田村きよ子
同　男爵夫人　南部隈子
同　山口貞子
同　古市幸子
同　岸澄子
同　三宅藤子
同　宮下咲子

同　羽田三緒子
同　高木鏁子
同　三浦敬子
同　岩下ゆか子
同　長谷川仲子
同　仁禮壽賀子
同　土肥多越子
同　岡山とし子
同　男爵夫人　加藤鈴子
同　吉武輝枝子
同　高橋孝子
同　鶴原誠子
同　中濱芳子
同　子爵夫人　松井正子
同　伯爵夫人　阿部篤子
同　菊池峯子
同　宮本樂子
同　守屋千代子

婦人衛生雜誌代價及廣告料

代價

一冊　定價金貳拾錢　郵稅壹錢
三冊（三ヶ月分）　前金郵稅共　金四拾五錢
十二冊（一ヶ年分）　前金郵稅共　金壹圓八拾錢

廣告料

一頁六十二行　一行二十三字
壹頁　金五圓　半頁　金貳圓五拾錢
○特別廣告　壹頁金拾圓　半頁金五圓
○半頁以下行數ヲ以テ計算スルモノハ一行貳拾五錢

規定

○本誌講讀申込ノ節ハ前金三ヶ月分以上本會事務所宛ニ送附セラルベシ但シ見本ハ郵券ニテ貳拾壹錢代用苦シカラズ○本誌休讀ノ節ハ速カニ報知セラルベシ通知ナキ分ハ講讀者ト見做ス但シ後金ニハ割引ナシ○轉居ノ節ハ新住宿所通知セラレタシ

大正元年十月十七日印刷
大正元年十月二十日發行

東京市本郷區駒込追分町二十九番地
編輯者兼發行者　莊司秋次郎

東京市本郷區駒込林町百七十二番地
印刷者　今非甚太郎

東京市本郷區駒込林町百七十二番地
印刷所　杏林舍

發行所　私立大日本婦人衛生會事務所
東京市麴町區富士見町二丁目三十二番地

賣捌所
東京市本郷區龍岡町　吐鳳堂
同市銀座四丁目　東海堂
同市京橋區鎗屋町　真明堂
同市本郷區本富士町　明文館
同市同區春木町　南江堂支店
京都市寺町二條南入　若林茂一郎
東京市日本橋區吳服町　北隆館
同市神田區表神保町　東京堂
同市本郷區本富士町　盛春堂
名古屋市本町三丁目　丸善書店

醫學博士 原 榮先生立案講述

通俗 肺病豫防及私宅療養教則

正確有效なる肺結核療養法を行はんと欲せば豫防及養生の根本觀念に通曉するより緊急なるはなし。本書は其根本觀念を社會に普及せんが爲め、在來の養生書と異り最近の肺病療養法をば悉く簡明なる七十餘條の教則に列擧し、一々詳細なる註解を加へ、更に應急處置、食餌法百餘項を附錄とす、實に肺病患者最良の教科書なり。家庭醫、家族、看護人諸君は之れに據り直ちに今日より最も有效なる療養の準備に着手せよ、正確なる療養の着手若し數日を遲るれば肺結核患者治癒の時日は乃ち數月を遲るゝ可し、此書を讀みて尚肺病の不治を嘆ずる者ありや。

全壹册
菊判洋裝美綴
正價金八拾錢
郵稅六錢

新刊

吳博士序

東京醫科大學精神病學教室
東京府巣鴨病院醫員
醫學士 杉江董先生述

通俗 精神病講話

全一册

四六判美綴
精巧寫眞版副畫
多數插入
正價金五拾錢
郵稅六錢

人一度該病に罹るや、直ちに以て恢復の策無きものとして袖手傍觀拱まゝに病魔の跳躪するに任かせ、然りと雖、精神病の原因發生は如何なるものなるかを熟知し、之れが豫防治療の道を講ずるに於ては必しも精神病は毎に至難不治の疾病に非ざることを斷言するに憚からず弊堂玆に見る所あり多年東京醫科大學精神病學教室に於て吳博士指導の下に本病を研究せられつゝある杉江學士に乞ひて本書を公にす。解說平易簡明、一は以て家庭の讀物となり、一は以て醫家教育家の參考書となる、卷中精神病患者の寫眞數十葉を插入す。蓋し本邦に於て此種の書籍は本書を以て嚆矢とす

東京市本郷區龍岡町・振替東京四一八番

發行所 電話下谷一六七二番 電話下谷四〇七九番 吐鳳堂書店